
黒の管理者

諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の管理者

【Nコード】

N5202T

【作者名】

諒

【あらすじ】

いつも通りの学校からの帰り道。

商店街の先の曲がり角を曲がると、そこには…。

突然、何の前触れもなく異世界に召喚された高校生、榊侑。彼女の、異世界大陸『レリ・ズフィールド』でのお話。

登場人物（前書き）

『黒の管理者』登場人物の設定です。

別名、『記憶力に見限られた、作者のための忘備録』と申します。

本文進行具合に合わせ、随時更新していく予定です。

（多少の遅れはあるかも知れませんが、ネタバレ感は薄いと思います
が、念のため、ご注意ください。）

宜しくお願い申し上げます。

登場人物

●サカキ ユウ 榊 侑【ユウ】 / 16歳

私立高校1年生。帰宅途中、突然の閃光に包まれベイルシャル国へ召喚される。

小学生の頃に母を交通事故で亡くしている為、召喚前は父と2人暮らしだった。

努力家で楽天的、前向きな性格に見えるが、どうも依存から逃れるための自己防衛の様子。

黒髪、黒い（濃褐色）瞳、149cm。何処にでも居そうな少女。

● ヴインセント・クリストファー・ロイス【ヴィンス・ヴィン】 / 22歳

若干20歳にしてベイルシャル国騎士団団長に上り詰めた騎士。騎士としての剣技・魔術は、ともに国内に敵う者はいないと噂されるほどの腕。

普段から穏やかで言葉少なく、物静か。“王家の森”でユウを発見、保護する。

王家に絶対忠誠を誓っており、職務に忠実。

プラチナ・ブロンドの髪、深いオリーブ色の瞳、187cm。美丈夫。

***** ベイルシャル国 *****

ステイアート・マーシャル【アート・ステイアート】/23歳
ベイルシャルル国騎士団 副団長。メンスウィル領主 マーシャル伯爵家次男。

ヴィンスに次ぐ剣の腕の持ち主。まっすぐな性格。猪突猛進。一番初めにユウを見つけた。

濃紺の髪、髪と同じ色の瞳、185cm。

ジュディ・ブリュネル【ジュディ】/30歳

ヴィンスの屋敷で使える侍女。ユウが屋敷に滞在する間、心から気遣い、世話をする。

亜麻色の髪、ヘーゼルの瞳、165cm。

ウォーレン・スウィフト【レン・ウォーレン】/22歳

ベイルシャルル国騎士団 副団長。グラスヴァーネス領主 スウィフト侯爵家三男。

攻撃系魔術に関してはヴィンスに次ぐ技量を持つ。濃いグレーの髪、グレーの瞳、178cm。

ラッセル・カイザ・ベイルシャルル/43歳

ベイルシャルル国 国王。少し赤みのかかった金髪、インディゴブルーの瞳、178cm。

サラ・ベイルシャルル/40歳

ベイルシャルル国 王妃。栗色の髪、紫紺の瞳、160cm。

ダリル・ヘンディー【ダリル】／48歳
ベイルシャルル国 宰相。ダークブラウンの髪、ヘーゼルの瞳、
172cm。

エディ・メイス 【エディ】／58歳
ベイルシャルル国 王宮付魔術師団 師団長。
プラチナ・ブロンドの髪、深いオリーブ色の瞳、185cm。

ルーカス・レイモンド・ベイルシャルル【ルー・ルーカス】／
22歳
ベイルシャルル国 王太子。王位継承第一位。
常に沈着冷静。実は情熱家。栗色の髪、インディゴブルーの瞳、
179cm。

フィオナ・ベイルシャルル【フィー・フィオナ】／18歳
ベイルシャルル国 第1王女。ルーカスの妹姫。愛らしい顔つきの
皇女。

その声は、小鳥のさえずりと喻えられる。少し赤みのかかった金
髪、紫紺の瞳、165cm。

ナディア・スペンサー【ナディア】／25歳
フィオナ付女官。スペンサー子爵家長女。15歳のときに亡くな
った母が王妃の侍女であった。
母が亡くなると同時に侍女として王家に召抱えられる。淡い栗色
の髪、琥珀色の瞳、162cm。

リア・ベイリー 【リア】 / 17歳

フィオナ付侍女。市井の出。年齢が近いこともあり、ユウが侍女見習いとしてフィオナに就く際、

親身になって世話をする。話好き。マツトカラーの髪、エメラルドグリーン色の瞳、160cm。

ジェラルド・ベイルシャルル【ジェイ・ジェラルド】 / 18歳
ベイルシャルル国 第2王子。王位継承第二位。

フィオナとは双子の兄妹。少し赤みのかかった金髪、インディゴブルーの瞳、182cm。

+++++ カーエンタール国 +++++

アドルフ・カーエンタール / 20歳

カーエンタール国 王太子。白銀の髪、ヴァイオレットの瞳、182cm。

ユーリウス・グリユーネヴァルト / 20歳

カーエンタール国 騎士。グリユーネヴァルト男爵家 長男。

紺碧の髪、髪と同色の瞳、185cm。

レオナルト・ベルツ / 28歳

カーエンタール国 魔術師。濃茶の髪、琥珀色の瞳、175cm。

登場人物（後書き）

・ 2011 / 6 / 11	ウォーレン	追加
・ 2011 / 6 / 19	国王、王妃、ダリル、エディ	追加 / ルー
カス	追加	
・ 2011 / 6 / 26	フィオナ、ナディア	追加
・ 2011 / 7 / 2	リア	追加
・ 2011 / 7 / 18	ジェラルド、アドルフ	追加
・ 2011 / 9 / 15	ユーリウス、レオナルト	追加

リリースフィールドの世界（前書き）

『黒の管理者』の世界設定です。

別名、『記憶力に見限られた、作者のための忘備録 その2』と申します。

宜しく願い申し上げます。

レリーズフィールドの世界

<レリーズフィールド大陸>

三つの王政国家が存在する。

・ベイルシャル

領土はレリーズフィールド大陸の大半を占める。

大陸三国で最も古く、最大の国家。王家・ベイルシャル。

王都はベイルファスト。

温暖な気候のためか、農産業が盛ん。生産された農作物を使った加工品も質が良い。

食に対して非常に重きを置いている。

・カーエンタール

領土はレリーズフィールド大陸の北西に位置する。

大陸三国の中では最も新しい。王家・カーエンタール。

王都はカーアイン。

商業の発展が著しく、主な産業は貿易。

領土は一番小さいが貿易国家であるため、人が集まりやすく、人口は三国の二番目。

第一次産業はほとんど根付いておらず、生活に必要な物資はそのほとんどを他国からの輸入で賄っている。

貿易による国益増加に伴い、犯罪件数も増えた。そのため、軍事力強化に力を入れ、三国で最大の軍を保有している。

・レイズリール

領土はレリーズフィールド大陸の北東に位置する。

王家・レイズリール。王都はレイエット。

鉱物の産出量が三国の中で最も多く、その8割を占める。工業が主な産業。

優れた技術で作られる工業製品は、大陸内外問わず需要が高い。

<時間単位>

・時間 ↓ ホウル

・分 ↓ ミニ

・○時間 分 ↓ ○ホウ ミニ

一日は二十四ホウル。つまりは、単位をすり替えただけでございます……

0・(前書き)

この度は、お立ち寄りいただきありがとうございます。
完結目指して頑張りますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

……ミツケタ。

王宮の一角で、黒に近い灰褐色の髪の男が、クク、と喉を鳴らす。手には、仄明るく光る球体。

それに映る映像を覗き込み、男は古の言葉で綴られた術を唱え始めた。

もう間もなく日が沈んでしまいそうな、午後六時を少し過ぎた時間。

鴉の羽のような黒髪をポニーテールにした少女が、商店街の歩道を一目散に駆けていく。

「ああ、もう、こんな時間。早く帰らないと、お父さんのご飯の支度があ……」

少女は泣きそうな顔で左手の腕時計をチラチラと覗きながら、スビードを落とすことなく、住宅街への曲がり角を曲がった。

刹那、薄暗い路地にもかかわらず、周りの景色が一気に白く変わる。

「えっ？」

辺りに薄暗さが戻ったとき、そこに、少女の姿はなかった……。

1・（前書き）

本文中の会話ですが、暫くの間、「」は日本語（こちらの世界の言葉）、『』は異世界の言葉、とご理解いただけると助かります。（設定上、別言語なので…。勝手に言ってますみません…）

また、本文中に暴力的な（ナイフで切られる）シーンを含みます。不快に思われる方、苦手な方は、閲覧をお控え下さいますようお願い申し上げます。

ご協力、宜しくお願い申し上げます（・ω・）ど。

「うん……」

とても心地のいい風が、頬を撫でていく。

まだ、ぼんやりする意識のまま、ゆっくりと重い瞼を持ち上げた。

緑生い茂る木々。咲き誇る色とりどりの花。

優しく降り注ぐ太陽の光が、眩しい。

（確か、私、放課後に補習名目で先生に居残りさせられてたはずよね？）

だとしたら、こんなに太陽が高いはずがない。

勢いよく上体を起こし、時間を確かめようと左腕にあるはずの時計に目をやると、その存在は跡形もなく消えていた。

「一体、なにがどうなってるの？」

辺りには人一人おらず、楽園のような森の中で座ったまま、少女はただ、途方にくれた。

その場で暫く様子を見てみたものの、やはり、誰一人として通りかかるような気配はない。

「……しょうがない、誰か捜そう」

彼女は、制服のスカートについた落ち葉を払い落とし、立ち上がって辺りをぐるりと見渡す。

少し先にどうにか通れそうな小道を見つけ、そちらに向けて足を踏み出したその瞬間、背後から鋭い声が聴こえた。

『何処からここに入った』

「……！」

声の方向に振り返ろうとすると、即座に背後から身体を羽交い絞めにされ、喉元に硬くひんやりした感覚が当てられる。

「やあ……う」

添えられているのは、間違はなくナイフ。突然の予期せぬ事態に、言葉が出ない。

『どうした？ 何も言わんのか、侵入者』

耳元に響く、地を這うような怒りに満ちた音。

喉元に、熱い感覚が走る。その熱さと恐怖に、彼女の瞼からは涙が溢れた。

『待て』

彼女の正面から、また一人、男がやってきた。

『ヴィンス！ “王家の森”に入り込んだ不審者だ。捕らえなければ！』

その男に向かって、背後の男は咎めるように叫ぶ。

『アート、よく考える。いきなりそれでは、何も言えまい。それに、この至近距離で逃げ出したとて、お前ほどの者なら逃がすこともないだろう？』

正面の男は少女に近づくと、喉元のナイフをそつと退け、代わりにハンカチをあてがった。

背後から羽交い絞めにしていた男は、チツと舌打ちをして、彼女を解放する。

と、同時に、少女はその場に膝から崩れ落ち、意識を闇の中に沈めていった。

1・（後書き）

いかがでしたでしょうか？

イロイロと、すぐにでも“ボロ”が出てきそうですが、何とか完結目指して頑張りたいと思います。

宜しくお願い申し上げます。

ここまでお付き合いいただき、ありがとございました。
そんな貴方に、心からの感謝を。

でした。

諒

どれくらい時間が過ぎたのだろう。

柔らかに抱きとめられているような感覚の中で、少女は再び目を開けた。

「……」

簡素ではあるが、使いやすそうに整えられた室内。

その窓際に備え付けられたベッドの上に、彼女はいた。

開け放たれた向かいの窓からはさわやかな風が吹き込み、カーテンを揺らしている。

そつと喉元に手をやると、包帯が巻かれている。

どうやら、ナイフでつけられた傷の手当てをしてくれたらしい。ほう、と一つ、溜息をつく。

（私、どうしちゃったんだろう……）

『目が覚めましたか？』

ぼんやりしていた少女の耳に、穏やかな男の声が届く。

声の主は、ドアを背に立っていた。

『部下が大変失礼をしました。彼に代わって、お詫びをさせていた
だきたい』

何かを話しながら、その男はゆっくり近づいてくる。

少女には、“声”は聞こえど、その“言葉”が全く理解できない。

その恐怖に、僅かな身体の震えを感じ、彼女はとうしようもなく俯いた。

『どうなさいました、お嬢さん？』

ベッドの前で立ち止まり身体を屈めて、その男は不思議そうに少女の顔を覗き込んだ。

シーツを掴んでいた手に、そっと触れられる。

——何を怖がっている。侵入者の分際で。

意識の中に直接飛び込んできた“言葉”に、全身の血が一瞬にして沸き上がるような感情が、少女に湧き上がる。

添えられた手を振り払い、睨みつけるように視線を返した。

「侵入者だなんてっ！ 私にも解らないわよっ！」

思わず叫んだあと、彼女はハッと我に返る。

頭の上から落とされる、男の、射抜くような冷たく鋭い視線に、身体はガタガタ震え、無意識に掴んでいたシーツをさらに強く握り締めていた。

彼女の眼から溢れる涙が止まらない。

（こんなのイケナイ。私は、強く、明るく、いなければならぬのに）

——泣くな。泣いても疲れるだけだ。

再び意識に飛び込んできた“言葉”に、少女は顔を上げる。肩に手が添えられていた。

——解るか？ 私の言っていることが。

止まらない涙を放ったまま、彼女は必死で頷いた。

——とりあえず、落ち着け。

男は紅茶の入ったカップを差し出した。

——おかしなものは入っていない。だから、安心して飲んでいい。その紅茶の仄かな香りと温かさは、恐怖に囚われた少女を解放してくれるものだった。

2・(後書き)

諸事情(?)により、2話連続でUPです。
宜しければ、もう1話 お付き合ってくださいませ。

——どうだ？ 少しは落ち着いたか？

「はい、ありがとうございます。お紅茶、ご馳走様でした」

彼女は、すっかり飲み干してしまったカップを男に手渡す。

——声に出さなくてもいい。身体に触れていれば意思疎通できるから。

右手を肩に置いたまま、左手でカップを受け取り、彼は少し笑った。

——さて、落ち着いたなら、いくつか質問をしたい。その答えによつては、これからのお前の境遇が変わるから、決して嘘はつかないように。いいか？

その言葉に、少女はコクコクと頷く。

——では、まず、名を。私はヴィンセント・クリストファー・ロイスだ。

——榊侑です。

——サカキ、ユウ？

——そう。姓が榊で、名前が侑。

——では、ユウと呼ぶが構わないか？

ユウは頷く。

——ユウ。君がいた場所はこの国の許可された者以外は立ち入れない場所だったんだが、どうやって入ったか説明してくれ。

——解りません。っていうか、その前に、ここどこ？ 私、帰ら

なきや。お父さんが、お腹空かせて待つてるから。

——— とういうことだ？

——— だから、私には解りませんってば。補習で遅くなって、学校から急いで帰ってたのに、突然目の前が眩しくなって、気がついたらあの場所にいたの。で、ここ、ドコ？

そこまで聞くと、ヴィンセントと名乗った男は、目を閉じた。

——— ここは、ベイルシャルル国の王都、ベイルファスト、だ。

——— そんな場所、知らない。ねえ、ホントのどこ、教えて？ あ、どこかの国の領事館とか？

——— 嘘ではない。ここは、レリーズフィールド大陸のベイルシャルル国だ。間違っても領事館などという場所ではない。

——— 知らない、知らないっ！ そんな国の名前なんて、知らないわよっ！

——— シーツをギュッと握り締め、大きく頭を振る。

——— …… 先程、ユウは、『突然目の前が眩しくなった』、と言っ
たな？

——— うん。

——— 訓練生時代に読んだ古文書で、“召喚の術”を発動させた時
召喚対象は目も開けていられない程の光に包まれる、と読んだ覚え
がある。これが正しいとすると、何処かの誰かが術を使つて、君が
いた世界からこちらの世界へ、君を呼び込んだのかも知れない……。
確証はないが。

——— 呼び込むって……。なんですか、それ？ どうして、私が？
——— 理由は判らない。

——— 「私はうちに帰りたいだけよ？ ねえ、お願いだから、私を、うち
に帰してっ！」

——— 肝心なところをはぐらかされ、思わず目の前の男の両腕を掴み、
身体を揺する。

——すまない、それはできない。召喚魔術は、今や、禁忌の古代魔術。その術を発動させたものは、その理由がどうであれ、処刑される。

彼は、そうやって表情を歪め、ユウから視線を逸らせた。

——……一人に、して……。

ユウは、強く掴んでいた彼の両腕を払い除けるように離し、シーツを頭から被り込む。

小さな溜息がシーツの向こう側から聞こえ、暫くすると、人の気配もなくなった。

涙が溢れて止まらない。彼女は、泣き声を我慢するのに精一杯だった。

3・(後書き)

本文中に、“――”で始まる会話(?)がありました。が、魔術で直接相手の意識に語る、という設定です…。

(ヴインセント君が冒頭部でちらっと申しております) 加えて、『意識上の会話』ということ、

普段の話し言葉とは、若干、印象・言い回しが異なります。

いやはや、我が儘な設定が多くて、誠に申し訳ございませんm――
――m。

すべては、文書き能力の低い、私のせいでございます…(x――x;)
ごめんなさ〜いい〜。。。。(ノ、)(。。。)

今回も、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
そんなあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

その夜、彼女は泣き明かした。

でも、どんなに悲しみに暮れていても時間は刻々と過ぎ、朝がやってくることを、改めて思い知る。

窓から差し込む眩しい朝日の中で、ユウは、ぼんやりと空を眺める。

ほとんど眠れなかったせいで、瞼が重い。

でももう、そんなことはどうでもいい、と思っていた。

元の世界には、父の元には、帰れない。

そう思うと、また、涙がユウの頬を伝い始めた。

呆然とベッドの上で俯いていると、ドアをノックする乾いた音が耳に届く。

ゆっくりと顔を上げると、白金の髪的美丈夫が驚いた表情でこちらを見ていた。

彼はユウに歩み寄り、そつと肩に触れた。

——気分は……。良い訳がないな、その様子だと。

ユウは、ただ、俯いた。

——ユウには、暫くの間、ここで滞在してもらうことにした。ここは私の屋敷だ。気を張らずに、ゆっくりすると良い。

——あ、あの、ヴィンセントさん……。

——ヴィンス、で良い。皆、私のことをそう呼ぶ。

——ヴィンスさん。

——ヴィンス、だよ？ ユウ。

——私、ここでお世話にはなれない。

ユウが顔を上げてそう言うと、ヴィンセントの整った眉がピクリと上がった。

——何故？

——何故って……。私、この“世界”の人間じゃないんでしょ？
得体の知れない者がいれば、きっと、あなたの家族だって気味が悪いだろうし。

ユウがそこまで言うと、ヴィンセントは跪いて視線を合わせ、彼女の左手を取った。

——気にしなくてもいい。この屋敷には、私一人だ。ああ、勿論、仕えてくれている人間が多少はいるが、全く持って気に病むことはない。

そう言って、彼はふわりと優しい笑顔をユウに向ける。
そして、ポケットから何かを取り出した。

——言葉の不自由を解消できるかも知れない術をかけておいた。
うまく行くといいんだが……。

右手に持ったそれを、相手の左の掌に押し付ける。
何の飾り気もない、銀色のリングだった。

——これ……。

左の掌の上で白く光るそれを、彼女はじっと見つめる。

——元の世界に、還してやりたいのは山々なんだが……。これで許してはもらえないだろうか？

ヴィンセントは、掌から自身の左手でリングを拾い上げ、ユウの左手の指に通す。

彼女は、一瞬、空間の歪むような不快な感覚に包まれたが、それはすぐに無くなった。

「どうですか？ 私の言っている言葉が理解できますか？」

穏やかな口調のヴィンスの声。今度は彼女にもはっきりと言葉の意味を理解できる。

「はい、解ります」

「良かった。とりあえず、もう暫くはゆっくり休むと良いでしょう。あとで、必要なものを届けさせます。食欲は？」

（何も、欲しくない）

彼女は、その意思をのせて、ゆるゆると首を横に振る。

「そうですか……。さ、横になって。もう一眠りなさい」

ユウを再びベッドに寝かせた後、ヴィンセントは静かに部屋を出て行った。

4・(後書き)

これで、ようやく会話のややこしい設定が取り払えました。

(→なら、そんな設定にするなっていう…。すみませんm(____;) ;

ご協力ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

今月中にもう少しお話を進めたいと思っています。

宜しければ、またお立ち寄りくださいませ。

ここまでお付き合いくださったあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

窓をすり抜けてくる、暖かな光が誘う微睡みを、コツコツとドアをノックする音が邪魔をする。

ぼんやりした意識のまま、音がした方にユウが視線を移すと、大きなバスケットを抱えた男とワゴンを押した女が、一人ずつ入ってきたのが彼女の視界に映った。

「気が付いたか」

男の声に、起き上がろうとするユウを支えようと、女は大急ぎでワゴンをベッド脇に置き駆け寄った。

「ご無理なさらず。傷に響きます」

「……すみません。ありがとうございます」

身体を支えられて、ユウがベッドの上で身体を起こすと、バスケットを壁際のチェストの上に置いた男が近寄ってきた。

「傷は、痛むか」

「いえ。おかげさまで、今はなんともありません」

何となく聴き覚えがある声を警戒しながら答える彼女に、見下すような態度で接する男。その男に向かって、水を注いだグラスを手にした女が釘を刺す。

「ステイアート様、ユウ様はまだ、お身体がお辛うございます。もっとお気遣いなさってくださいまし」

その言葉に、男は濃紺の瞳をスツと細める。

「……これでも、悪いと思っているんだ。でなければ、ここには来

ない」

「あの……？」

「お前の首の傷、私が付けたものだ。悪かった」

喉元にユウの手が伸びる。

目の前にいる、聴き覚えのある声の主は、あの時、彼女を後ろから羽交い絞めにした男だったようだ。

「……単刀直入に訊く。“王家の森”の結界を、どうやって破った？」

その男は、ユウに向かって侮蔑の眼差しを投げつけた。

「ステイアート様！」

「アート、そこまでにしる。相手は昨日、ようやく目を覚ました怪我人だ。今はまだ、尋問する時期^{とき}ではない」

いつの間にか、ヴィンセントがドアを背に立っていた。

「しかし、ヴィンス！」

「いい加減にしないか、ステイアート！」

ユウは無意識のうちにシーツを握りしめ、額に玉のような汗をかき、ガタガタと震えていた。

そんな彼女の変化に、ユウの隣に立っていた女は、手にしたグラスをワゴンに戻し、お湯で絞ったタオルを取り出して「汗を」と柔らかに微笑む。

ヴィンセントはゆっくりこちらに歩み寄り、それと同時に、ヴィンセントからアートと呼ばれた男は、一歩後ろに下がった。

「ユウ様、どうぞ、お身体を休めてくださいませ。ヴィンセント様、私、このままこちらに残っても？」

「ああ、ユウを頼む、ジュディ。アート、お前は職務に戻れ」

ヴィンセントからそう命じられた男は、苦々しい表情のままユウの事を一瞥し、無言で部屋を出て行った。

5・（後書き）

新たに二人、でてまいりました。

（あ、一人は既出か……。）

後日、『登場人物等の設定』という名の“記憶力に見放された作者用の忘備録”をプロローグの前に割り込ませるつもりです。本文の進行に合わせて随時更新させていく予定です。宜しくお願い致します。

6・（前書き）

すみません。長いです。

キリの良い適当な部分が見当たらず、今回、2,000字オーバーです。

特に、携帯からご覧いただいている方、本当にゴメンナサイ。腱鞘炎に、ならないで、ね？

「ユウ、度々申し訳ありません。アートはいい奴なんですが、少々、真面目過ぎるところがあつて…」

「いえ……」

「さ、ユウ様、こちらを羽織ってくださいまし。お身体が冷えてしまいます」

バスケットから取り出した淡い色彩のストールをふわりと肩から掛けられる。

「あ、すみません。ありがとうございます」

「ユウ、彼女はジュディ。君の世話をしてくれるよう、頼んであります」

「ユウ様、申し遅れました。私、ヴィンセント様にお仕えしております、ジュディ・ブリュネルと申します。ジュディ、とお呼び下さい。ユウ様がこちらでご静養なさる間のお世話を、ヴィンセント様より承っております。どうぞ、ご遠慮なさらず御用をお申し付けくださいませね」

そう言いながら、彼女はユウの手からタオルを受け取り、そつと微笑む。

「……いろいろとご迷惑をおかけします」

「まあ、迷惑だなんて。ステイアート様の方が、よっぽど迷惑ですわ」

「ジュディ、それはあんまりだ。アートが可哀想だよ」

ぷう、と頬を膨らませる彼女の隣で、ヴィンセントが口元を押さ

えクツクツと笑った。

「気分はどうですか？ 少しは楽になりましたか？」

ヴィンセントがベッドの脇で跪き、ユウの顔を覗き込む。

「……ええ、おかげさまで」

彼女は俯いたまま、ニコリともせずそう答えた。

「……少し、話をしましょうか？」

ジユデイがヴィンセントのいるところまで椅子を持ってくる。

彼は片手を挙げ「ありがとう」とジユデイに礼を言い、椅子に掛けた。

ジユデイは「何か御用の際は呼び立て下さいませ」と、一つ黙礼をして部屋を出て行った。

「さて、何から話しましょうか？ 何か訊きたいことはないですか？」

相変わらず、物腰の柔らかい話し方で言葉を紡ぐヴィンセント。

「訊きたいことが多すぎて、どれから訊いていいの……」

「そうですね。では、この大陸の^{せかい}ことを少し話しましょうか？」

穏やかに微笑むヴィンセントに、ユウは、素直に首を縦に振る。

* * * * *

自然豊かでおおらかな大地、『レリーズフィールド』。

この母なる大陸には、三つの王政国家がある。

一つは、大陸の北東部にある『レイズリール』。

鉱物の産出が多く、工業が主な産業で、この大陸では二番目に大きいな領土を持つ国。

優れた技術の工業製品を大陸内外の国に輸出している。

一つは、大陸の北西部にある『カーエンタール』。

領土は一番小さいが商業が盛んで、主に貿易で成り立つ国。

一次産業がほとんど根付いておらず、生活に必要なものは、そのほとんどを他国からの輸入で賄っている。

また、貿易国であることから犯罪も多く、その為、大陸三国の中では、最も大きな軍事力を保有している。

そして、最後の一つは、大陸の南側殆どを占める『ベイルシャー』。

レリーズフィールド三国の中で最も領地が大きく、一番長い歴史を持ち、また、最も栄えている国。

農業が盛んで、農産物はもちろん、その加工品の品質にも優れている。

この大陸三国は、遙か昔に起きた大きな戦争以降、万一、その領地を他国から侵略されるような事態に陥ったとしても、すぐさま当事者以外の国の援助が入る協定を結んだ。

とは言っても、ここ百年以上、そういった事態は起きておらず、どの国家の国民達にも安穏な暮らしが続いている。

* * * * *

グインセントが物静かに語るこの“世界”を、ユウはじっと聴いていた。

彼女が義務教育で教わった世界には、『レリーズフィールド』などと言う名前的大陸はなかった。

やはり、この“世界”は、彼女がいた世界ではないらしい。

ユウは溢れてくる不安な気持ちを抑え、ヴィンセントに向き直る。

「……私、コチラの“世界”に来て、何日経ったんでしょう？」

「眠り続けていたのは一週間です。ですから、今日で八日目。実は、貴女の首を傷付けたナイフ、アートの刃に弱い毒を仕込んであつて……。貴女にはこの毒に耐性がなかったのか、大変辛い思いをさせてしまった。本当に申し訳ない」

ヴィンセントが深々と頭を下げる。

その姿に、なぜが動揺してしまう彼女がいた。

「あの、止めて下さい。こうして手当してもらっているし、もういいですから……」

「身体はどうですか？ 傷は、痛みますか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうですか……。術が間に合ったようで、よかった……」

ホッとしたように表情を緩めるヴィンセントに、ユウは気になった言葉を問う。

「術？」

「ええ、解毒のための魔術ですが、それが何か？」

「魔術、ですか」

「力の小さな者でも使えるような特別なものではありませんが、どうなされました？」

「……私の国に、魔術は存在しません」

「そう、ですか。ここに住まう者は、大なり小なり魔力を持ちます。魔力が無い、魔術が使えないと言ったことは有り得ないのです」

「……もう、どうやっても、帰れませんか？」

絞り出すような声の問いかけに、ヴィンセントは辛そうな笑顔を浮かべた。

何も言わない目の前の男に、彼女は縋るような視線を向ける。

嫌な沈黙が部屋の中に満ちていく。

その重い静寂に堪え切れず、ユウが両掌で顔を覆うと、その隙間から涙がこぼれた。

「……今、貴女をこの世界に呼び寄せた人間を全力で捜しています。すみません。私たちができるのは、それが精一杯なんです……」

「捜し出してどうするんですか？ その犯人が見つかったとしても、私は帰れないんでしょう？ なら、犯人なんかどうだっていい。私を、元の世界に帰してっ！」

抑えていた不安な気持ちが一気に溢れ、咽び泣く声が叫び声に変わる。

ユウの顔を覆っていた手は、何時しかシートとともに固く握り締められ、強く震えた。

慟哭が部屋中に響き渡り、ベッドの上で折った膝を抱え込んだ彼女の微かに震える背中を、温かく大きな手はそつと撫で続けた。

暫くそれが続き、その声がほんの少し落ち着いた頃、項にヒヤリとした手が添えられ、直後、ユウは恐ろしいほどの眠気に襲われた。
「な、にを？」

ユウがヴィンセントを睨み付けようとするも、力は全く入らない。

「“眠り”の魔術をかけました。……もう少し、おやすみなさい」
辛うじてヴィンセントの姿を視界の端にとらえたところで、ユウはそのまま深い眠りに落ちて行った。

「……力及ばずの私を、どうか許してください」
震える声で呟いたその顔が、恐ろしいほど苦しげに歪んでいたことを、彼女が知ることはなかった。

6・（後書き）

ここまでお読みいただきました、心優しきあなた様。

お疲れ様でした。そして、心から、ありがとうございます。

諒でした。

ユウがこちらの“世界”で過ごし始めて、十日が過ぎた。

ようやくベッドから起き上がれるまで体調は回復したものの、暫く意識のない寝たきりが続いたせいか、彼女の体力はすっかり落ちてしまっていた。

加えて、元々少し細めだった体型も、鏡の前に立つのを避けなくなるほどに痩せ細ってしまっていた。

「……なくなっちゃった」

「まあ、ユウ様ったら」

着替えを済ませて鏡に向かい、胸元に手を置いてぼそりと零したユウに、ジュディは優しく微笑んでこう続けた。

「しっかりとお食事をとられてお休みになられば、すぐに戻ります。ユウ様は、まだまだこれからのお方ですから」

励まそうとしてくれたその言葉を、ユウは何故かすっきりと受け入れられなかった。

「ジュディ？」

「はい、どうなさいました？ ユウ様」

「ジュディは私のこと、いくつだと思ってる？」

彼女は、しっくりこなかったところを、思い切ったたずねてみる。「十歳くらいとお見受けしていましたが……。違いました？」

悪びれた様子もなくニツコリ笑って答えたジュディを、ユウは、呆然と見詰めるしかできなかった。

「……そう、そんなことが」

朝食の席で、ヴィンセントが、堪え切れないといった風に口元を押さえ笑っている。

ユウはそんな彼を、厳しい目線で睨み付けた。

「……いや、失礼。実は私も、ユウがそのくらいの年齢だと思っていたよ」

「ヴィンスまで……」

「まさか、十六歳のレディだとは思わなかった。大変失礼しましたね、ユウ」

「確かに私、身長は高くないし、幼く見られがちだけど……」

少し拗ねたような口調で呟くと、隣でお茶を準備してくれていたジユディがユウの方を向いて跪いた。

「ユウ様。此度のご無礼、本当に申し訳ございませんでした。どうぞ、お気の済むように処分を」

「ジユディ……。あの、そんな……」

「どうぞ、なんなりと罰をお与えくださいませ、ユウ様」

ユウは、真剣な眼差しでこちらを見るジユディにどうしていいのかわからず、テーブルを挟んで正面に座るヴィンセントに情けない視線を送る。

それに気づいたヴィンセントは、ゆつくりと笑ってユウに告げた。

「ユウは、ジユディにどうして欲しい？」

「何も。ここでお世話になってからずっと良くしてもらってるし、寧ろこちらからお礼をしなければならぬくらいなのに」

「まあ、ユウ様。勿体ないお言葉……」

ジュディの淡い褐色の瞳が、うるうると揺れる。

ユウは椅子から立ち上がり、膝についてジュディと目線を合わせた。

「ね、立って、ジュディ。私の方こそ、ごめんなさい。どうか、気にしないで」

「ユウ様……」

「さ、ユウもジュディも。せっかくの食事が台無しになってしまうよ？」

いつの間にか二人のもとに来ていたヴィンセントの手が、その肩をそっと叩いた。

「私、お腹すいちゃった。頑張ってたたくさん食べるね？ ジュディ」

「ええ、是非そうなさってくださいまし、ユウ様」

テーブルには、朝食として、ほっこりと湯気を立てるスープや、器に露が見受けられるほどよく冷やされたサラダなど、実に豊かに準備されていた。

「すこ……」

「ベイルシャルルでは、朝食は、一日の食事の中でも一番大切なものとされています。ですから、たくさん召し上がってくださいね」
ヴィンセントの横で紅茶をカップに注ぎながら、ジュディがこやかに答える。

「ああ、ジュディ、ありがとう。さあ、ユウ、食事にしましょう」

「はい。いただきますっ」

こうして、朝の食卓で、和やかな時間が過ぎて行った。

7・（後書き）

皆さん、朝ご飯、きちんと食べてますか？

朝は特に忙しい時間帯なので（ギリギリまで寝たい人なのです…）、シッカリ朝食をとるのはなかなか難しいのが現状ですが、これからちゃんと食べるように心がけます。ハイ。（^^）――旦

さて、今日ももう少し進めますね？

宜しければ、お付き合いくださいます。

ありがとうございました。

朝食を終えて暫くすると、ヴィンセントは出掛けて行った。

ぼんやりと窓の外を眺めていたユウは、今更ながら、ヴィンセントのことを何も知らないことを、ふっと思い出した。

「こんなにお世話になってるのに……。何やってんだ、私」

自室として与えられた部屋の窓枠に肘をつき、小さな溜息をこぼす。

「どう、なさいました？」

レモン入りの氷を浮かべたグラスを手にしたジュディが、心配そうにたずねてくる。

「ん。私、優しくしてもらってるヴィンスのこと何も知らないし、お世話になってるのに何もしてないし、ダメだなあ、って思っ」

ユウは、窓の外から視線を戻して、よく冷えたグラスを両手で受け取り、小さな声で呟いた。

「ヴィンセント様のこと、ですか？　どんなことをお知りになりたいのです？」

「お仕事は何をしてるとか、家族のこととか、……って、何言ってるんだらうね？　私」

「お聞かせいたしましょうか？　私が知る限りの範囲ではありますけれど」

ジュディがにこりと微笑んだ。

ヴィンセントは、このバイルシャルル国の騎士団の団長を務めて

いる。

今のユウと同じ十六歳で騎士団に入り、二年前、騎士団始まって以来のスピードで、このポストに就いた。

剣技、魔術とも、緻密且つ正確なものであり、国内においては右に並ぶ者はないと言われるほどの逸材、それが異例の昇進の理由らしい。

「ご両親は……」

「私が来るより早くにお亡くなりになられた、と聞いております」「そう、なんだ……」

ジュディは、ヴィンセントが騎士団に入団する一年前からここに仕えているというが、これまでにこの屋敷で、ヴィンセントの家族と言える人の姿を見たことはなかった、と語った。

ユウも小学生の頃、交通事故で母親を亡くしていた。

それ以来、彼女は、彼女の父親と二人三脚のように支えあい、生きてきた。

（だけど、ヴィンスには……）

「ヴィンセント様は、とてもお強い方です」

暗い表情を見せたユウに、ジュディが唐突に断言する。

「そうでなければ、国王陛下ご一家をお護りする騎士様になどなれません」

そう言って、力づけるようにユウの肩を抱いた。

「……ねえ、ジュディ。私にもできる仕事、ない？」

彼女は、肩に置かれたジュディの手に自分の手を重ね、返事を待った。

「仕事って……」

「私も何かできることをしたい。ヴィンスに面倒を見てもらっただけじゃ、いけないと思うから。家、お母さんがいなかったから、私、家事仕事ずつとやってたし、お料理だって、少しくらいは……」

「ユウ様……」

ユウは、ジュディの、少し困ったような笑顔を見て、ハッと我に返った。

「ダメ、かな？ やっぱり」

「一度、ヴィンセント様にお伺いしてみしよう。それからでも遅くはないでしょうから」

彼女が受け取ったままずっと手に握りしめていた、すっかり温くなってしまったレモン水のグラスをスッと抜き取り、ジュディはフフ、と微笑んだ。

8・（後書き）

コウは、誰かにベツタリ頼ることができないコです。

どちらかというと、なんでも頑張って自分でやってしまうようなタイプ。

こういうコは、本当にダメになってしまった時が心配です。

（そうならないように書け！ってことなんですけどね…ええ。）

いつもありがとうございます。

足をお運びいただいたあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

9・（前書き）

本文中、暴力的なシーンの記述があります。

このようなシーンが苦手な方、不快に思われる方は、恐れ入りますが
閲覧をお控えくださいますようお願い申し上げます。

皆様のご協力に感謝致します。

ユウが微笑ましい発言をしてから、三日が経過した。

ヴィンセントは仕事が忙しいらしく、朝は日が昇る前に王城に出向き、夜は彼女がすっかり寝静まった頃に帰ってくるという生活を送っているようで、この三日間、二人は全く顔を合わせていない。

目を覚ました翌日にヴィンセントから貰ったリングのおかげで、ユウは、会話に困ることはなくなっていた。

けれど、時間つぶしを兼ねて知識をつけるために本を読もうと開いても、全く文字が読めなかった。

「オールオツケー、ってことじゃないのね……」

ユウは、苦々しい思いにテーブルに肘をつき、目の前に積み上げた、^{かくかく}角々した記号のような文字がびっしりと書きつめられた、分厚い紙の束を睨んだ。

「随分と恐ろしい顔をするもんだな」

突然聞こえた声に、ユウは、その主がいるらしい方向を見遣る。

「何か、御用ですか……」

開け放したドアに、寄り掛かるように立っていたステイアートが、ゆっくりとユウに近づいてくる。

ユウを見る深海色の瞳は、相変わらず冷厳で、彼女は身を隠したい気分に駆られた。

しかし、徐々に距離を詰めてくるその視線の刺々しさに、身が竦んで動けなかった。

「別に、用なんてない。怪我人の見舞いに来ただけさ」

部屋の主に歓迎されない訪問者は、そう言つて真横に立つと、ユウの顎に手をかけ、上を向けさせた。
「……っう！」

ようやく塞がつてきていた喉元の傷の、引き攣れるような痛みに僅かに顔を歪め、彼女は、すぐ目の前の男の顔を睨み付ける。

「随分とヴィンスのお気に召したようだな。どうやって取り入った？」

「な！」

「ヴィンスが、得体も知れぬお前の事を気にかけている。不可侵のはずである“王家の森”の森に侵入したお前を、だ。本来なら即、処刑されるべきモノに、何故、奴が、心を碎かねばならんっ！」

ステイアートが言い終わると同時に、床に大きな穴が開きそんな音を立てて、ユウは、座っていた椅子と共に床へと倒れこんだ。
左頬が、火を押し付けられたように熱く、痛みを訴える。どうやら渾身の力で打たれたらしい。

「……う」

くらくらする頭をどうにか持ち上げ顔を上げると、ユウのすぐ目の前に、履き込まれた革のブーツがあった。

「なかなかの根性だな？」

ユウは、自分を見下ろす男の、いつかと同じ、地を這うような怒りを含んだ声に恐怖を覚えたが、負けじと睨み返す。

ステイアートは、その視線を気にもかけず、倒れている彼女の背中を踏みつけ、その黒髪を掴んでグイと引き上げた。

背中に置かれた足に、一気に重みが科せられる。

「……あっ！」

背中からの圧で肺が押さえつけられ、息がごくわずかしが入らない。

その苦しきのあまり、ユウの目に、涙が滲む。

「どうした？ さっきまでの勢いは、どこへ行ったんだ？」

痛みを堪えて薄っすら開けたユウの視界に映った、ニヤリと笑う男の目には、軽蔑と憎しみの色のみが浮かんでいた。

「ユウ様っ？ ステイアート様、貴方、何をなさっているのです！」

ユウの遠ざかっていく意識の端で、ジューデイの悲鳴とこちらに駆けってくる足音とが、聞こえた。

9・（後書き）

ようやく落ち着いた生活を送れていたのに、また、一波乱起きてしまいました…。

どうしてユウはここまでアートに嫌われなくちゃならないんでしょう？

その理由は、また追々…。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。
そんなあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

——我ノカヲ引継ギシ、異界ノ娘ヨ。

彼女の意識の、遙か遠くから、聴き覚えのない声が、微かに聴こえる。

——主ハ、我ノカヲ引継ギシ娘。ソノ力、未ダ覚醒セザレドモ、ヤガテ開花シヨウゾ。

暗闇から響き渡るその声に、彼女は懸命に耳をそばだてる。

……あなたは、誰……？

——モウ、間モナクジャ。主ノ宿命ガ廻リ始メルゾヨ。覚悟致セ。

その言葉を最後に、闇の声は、消え失せた。

ふうっ、と息を吐いて、ユウは、ベッドの上でゆっくりと身体を起こす。

息苦しい胸とジリジリと痛む左頬が、濃紺の瞳から投げつけられる蔑んだ視線を思い出させる。

太陽の日差しで明るい、部屋の天井をぼんやり見上げながら、もう一つ、重い溜息をついた。

ふと意識を戻すと、ドアの向こうに、人の気配を感じる。

そして、ドアを開けたのは、ヴィンセントだった。

「ユウ？」

「ヴィンス……」

蒼い顔をして急ぎ足でベッドに近づいてくる人物に、ユウは視線を向ける。

「良かった、た……」

ホッとしたように微笑むと、彼はベッドの端に腰かけて自身の左手で彼女の左手を包み、右手でそつと痛む頬に触れた。

いつかの時のように、ひんやりとした感覚。彼女には、今はそれが気持ちよくて、自然と目を閉じられる。

「痛むか？」

心配げに顔を覗き込むヴィンセントに、ユウは「大丈夫」 と笑って見せる。

「すまない。ステイアートの愚かな行為、なんと詫びていいのか……」

……

左手を包んでいる手に力が入る。

「しょうがないよ。だって、私は、得体の知れな……」

「言っな！」

遮るように発せられた言葉に驚きを隠せない。

これまでのヴィンセントからは想像もつかないような厳しい声。

ユウは、言葉を噤んだ。

そして、グイ、と左手を引かれ、彼女の身体はヴィンセントの胸に収まる。

「頼む、自分を虐げるようなことは言わないでくれ……」

「ヴィ、ン……」

暖かな腕に包まれて、ただ、頬を伝ってほろほろと零れていく涙を、ユウは拭いもせずに見送った。

どうやら、あのまま泣き疲れて眠ってしまったらしい。

ユウが再び目を開けた時、既に部屋の中は暗く、ナイトテーブルにはランプが置かれ、仄暗い光を灯していた。

「……寝てばかり。働かざる者、喰うべからず、だ」

苦笑いしながら、彼女は一人、呟いた。

そして、心優しい人達に護られて、すっかり弱くなってしまった、と自身を責める。

これじゃ、いけない。誰も、頼っては、いけない。

一人でも、闘えるように。一人で、闘えるように……と。

そつとベッドから降り、閉じられていた窓を開けて、夜の空気を部屋に招き入れる。

大きく息を吸い込むと、踏みつけられた背中が、みしり、と痛んだ。

「明日、きちんと話さなくちゃ」

数多に輝く星たちを見上げ、もう一度、決心を固めた。

いつもと変わりなく、朝は訪れた。その日は、冷たい雨が降っていた。

様子を見に来たジユデイが、ベッドの上でぼんやりしているユウを見つけ、泣きながら駆け寄り、抱きしめた。

ユウは、話すのを嫌がるジユデイに頼み込み、あの日の出来事の終結を知った。

あのあと、ジユデイが悲鳴を上げるや否や、王城から転移して飛び込んできたヴィンセントが、ユウの髪を掴んでいたステイアートの左腕を叩き落として挨拶あげ、その身体の自由を魔術で以て奪い、そして、続いてやってきた騎士達に、自身の右腕ともいうべき彼を引き渡し、その身柄を王城へと連行させていた。

ちなみに、連行される時も、ステイアートは、然も当然、といった様子で、ぐったりして身動きしないユウを睨み付けていたらしい。

騎士達がステイアートを連れ去ってから、ヴィンセントはユウを抱き起こし、応急処置としての回復術を施した。

そして、彼女をベッドに移し、その看護をジユデイに託して王城に向かったあと、そのまま、丸三日目に当たる昨日まで、屋敷には一度も戻って来なかったと言う。

加えて、このたった三日で、ステイアートには一ヶ月の禁錮とその後二週間の謹慎、および向こう一年間の騎士報酬減額の、上官であるヴィンセントには監督不行届きを理由に三か月の騎士報酬減額、

と言う裁定が下されていた。

「心配かけてばかりで、ごめんなさい」

ユウは、俯いたまま、ジュディに謝る。

「ユウ様は何も悪くありません。貴女は謂れもなく異世界から引きずり込まれたお方。そんな方が、どうしてお詫びなど……」

「だって、気味が悪いでしょう？ 突然現れた、得体の知れない存在なんて。あの人がとった行動は、正しかったのよ、この国では、きつと」

昨日のヴィンセントの声が頭の中に響き渡ったが、彼女はそれを振り切った。

「たまたま、優しく護ってくれるヴィンスやジュディがいたから。だけど、こんなんじゃないダメだと思うの」

ベッドの脇で跪き手を握るジュディを、ユウは、じっと見つめた。
「……私、やっぱり、ここを出る。もう、これ以上、お世話にはない」

「ユ、ウ様……」

「ごめんね、ジュディ。今まで本当にありがとう。こんな私を受け入れて、心からお世話してもらったこと、絶対に忘れない」

ユウの傍らにはジュディがいるはずなのに、彼女には、霽がかかったようにその姿が見えなくなった。

そして、その傍らの心優しい女性は、握っていた手を自分の頬に押し当て、肩を震わせていた。

11・(後書き)

なんだか、読みにくい説明チックなダラダラした文がでてきてしまいました…。

流れるように読んでいける文を目指しているのですが、巧くいきな
い…。

ゴメンナサイ…m (_ _ : m。

大きくて温かな手が、そっとユウの左手を包む。

彼女はその温度に、ゆっくりと意識を浮上させた。

「起こしてしまったかな？」

ベッドサイドには、同じ目線の高さに、儚げに笑うヴィンセントがいた。

「ジユディから、聞いたよ」

「ごめん、なさい。こんなにお世話になったのに……」

「ユウが気に病むことではない。そもそも、私がもっと速くに手を打てば済むはずだったんだ。辛い思いばかり……本当にすまない」

「そんな。私こそ、もっと早くにここを出てれば、ヴィンスがこんなに疲れちゃうこともなかったし、ステイアートさんだって、あんなことせずに済んだのに……」

ユウは、彼女に向ける、ステイアートの、冷たく突き刺さる濃紺の瞳を思い出していた。

「ユウ」

「私、お世話になるばかりで、ごめんね？ 明日になったら、何処か遠くに行くから。だから、今日だけ、もう一晩だけ、ここに居させて？」

泣きそうになるのをどうにか抑えて、ヴィンセントを見る。

「すまない、ユウ。その希望を叶えてやることも、私にはできない」
ユウは、すいっと目線を天井に移し、無意識に唇を噛み締め、涙を堪える。

「今回の騒動で、ユウの存在が、宰相をはじめ、上層の人間に知れてしまった。経緯が経緯なだけに、君に対する警戒は並々ならない」
左手を包む大きな手に、力がこもる。

「即座に身柄確保の上、王城に連行せよ、と……」
ユウがもう一度、視線を自身の左に向けると、視線の先にいた彼は、俯いて肩を震わせていた。

彼らが言う“王家の森”に立ち入った彼女の身柄は、王城に連行されれば罪人のように扱われる事が想像に容易い。
そうして、それこそ、彼女は元の世界に帰ることなどできず、この地で果ててしまうのだろう。

ただ、寂しい、と言う感情のみが浮かんだ。
もう逢えないだろう、向こうにいる人達に、別れを告げられないことが、彼女には辛かった。

(……でも、もう、どうにもならない)

諦めたくはなかったけれど、そうせざるを得ない状況に、彼女は哀しかった。

「わかりました。準備します。少し、時間を下さい」

彼女は横たえていた身体をそろそろと起こし、左手を痛い位に握り締めるその手に、自身のもう一方の手をそつと重ねた。

「大丈夫。私なら、大丈夫だから……。ヴィンスが悪いんじゃないもの、貴方こそ、謝る必要はないよ。ね？」

その言葉に、弾かれたように、俯いていた顔が上がる。

「今まで、護ってくれて、ありがとう」

溢れそうになる涙を必死で抑え、ユウは目の前の、酷く憔悴した

表情の彼に向けて、精一杯、笑って見せた。

12・（後書き）

ヴィンスからの旅立ちです。

雲行きはよろしくないですが、ユウは、敢えて辛いと思われる道を選びました。

…が、ここでもまた、運命のあやが…。

ここで、第1章の終了です。

次から舞台は王城に変わります。

次回更新まで、少しお時間を頂きたいと思います。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。
心優しいあなた様に、最上級の感謝を。

た。

諒でし

0・（前書き）

ご無沙汰しております。

第2章、頑張つて始めたいと思います。

お時間が宜しければ、お付き合いくださいませ。

異世界『ベイルシャル』に、ユウが呼び込まれてから、今日で十七日目。

今、彼女は、目隠しをされ、後ろ手に枷をはめられて、馬車で王城への道を辿っている。

保護してくれた、この国の騎士とともに。

重苦しい空気の漂う空間で、ユウの目の前に座るのは、ベイルシャル国騎士団団長、ヴィンセント・クリストファー・ロイス。

本来なら、真っ先にその役目を果たすはずの彼が、異世界から来たという、身元も知れぬ彼女を今日まで保護した。

彼がいなければ、もっと早くに“王家の森”に無断で侵入した“つみびと罪人”として捕えられ、投獄されていたに違いない。

なぜ、匿ったのか。興味本位？ 気紛れ？ 同情？

ユウには、その理由を訊くことは叶わなかった。

あの日、あの場所に“落ちて”いなければ、こんな風に出逢わなかったのに……。

二人がヴィンセントの屋敷を出てから、かなりの時間がたった。それまで舗装されていない道をガタガタと走っていた馬車の揺れが、ピタリと止んだ。

屋敷を出る時には降っていた雨も、止んでいるのだろう、物音ひとつ、聴こえなかった。

「このままおとなしく待っていなさい」

今までに聴いたことのない、硬いヴィンセントの声に続き、馬車の扉の音がした。

どうやら、到着の報告に出たようだ。

（だから、頼っちゃダメだったのに…）

大丈夫、といったものの、不安に押しつぶされそうになり、ユウは、自責の念に苛まれる。

俯いていると、再び扉の音が聞こえ、「出ろ」と、短く命令する厳しい声がした。

目隠しを外され、突然明るさを取り戻した周囲に彼女は目を細めた。

経験のない揺れに耐えていた身体をゆっくり持ち上げかけた瞬間、「さつさとしろ！」と、背後から思い切り突き飛ばされてバランスを崩し、頭を下にしたまま、馬車から石畳のエントランスへと転げ落ちた。

「ユウ！」

少し離れた場所から、聴きなれた声がした。

すぐにも立ち上がりたいけれど、手が自由にならないので、ユウにはそれすらできない。

「大丈夫か？」

ヴィンセントが、手を差し伸べて助け起こした。

ユウの服についた汚れをさっと払った後、彼女の顔を見て驚く。馬車から落ちた時に、打ち付けたのだろう。右頬が青く腫れ、かすり傷ができていた。

「……ごめんなさい」

「どうして謝るんだ？ それより、少し動かないで。傷、消してしまっから」

そう言って、彼は、今しがたできた傷に、回復術を施した。術を発動させているため、そっと頬を撫でる手が冷たい。

「ヴィンス、何やってるんだ！」

馬車から一人の男が降りてくる。それは、ユウを突き飛ばした男。彼女は視線を合わさないよう、俯いた。

「レン、お前……」

怒りのこもったヴィンセントの声に、ユウがハッと我に返る。

彼は、彼女の肩に触れていた。

「ヴィン……ス。ダメ、私が悪いの。その人は何も……」

「ユウ。君は気にしなくていい。今はあの術を使っていないよ」

ヴィンセントはユウに向かってふわりと微笑むと、「レン」と男に向き直った。

「どういうつもりだ？ 何故、突き飛ばした！」

「はっ、ヴィンスこそ、どういうつもりだ？ そいつは“王家の森

”に侵入した“罪人”だぞ？　なぜそこまでしてやる必要があるんだ！”

凍てつくようなグレーの瞳が、ユウを射抜く。

「お前もか、レン」

「こんな奴のために、なんで、アートが牢に入れられなくちゃならない？　おかしいだろ！　牢に入るのはアートじゃない、コレだ！」
そう吐き捨てて、彼女の方につかつかと進んだかと思うと、左肩をドン、と突いた。

馬車の揺れの名残と不意の衝撃に、ユウはそのまま後ろに倒れそうになったが、ヴィンセントが倒すまいと抱き留めた。

「レン、待て！　ウォーレンっ！」

引き留めるヴィンセントを無視して、その男は去っていった。

「すまない、ユウ」

「しょうがないよ、ヴィンス。私は大丈夫だから。助けてくれて、ありがとう」

ユウがそう言つと、彼は少し哀しそうに笑った。

「……行こう。国王陛下がお待ちだ」

彼女は頷き、先に行く背中が続いた。

1・(後書き)

いつもありがとうございます。

ご無沙汰しております。10日ぶりのUPです。

今回から、文章の書き方を変えてみました。

…で、一言。『おかしい。そして、おかしい』。

(→某ヒーローの”S・y H i・h”でお願いします。)

頑張って(?) 思い悩みましたが、哀しいかな、この『おかしさ』の解消法を見つけれませんでした…。

ご意見・ご感想、絶賛受付中です。

是非とも、このおバカな身の程知らずに、愛の手を。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。
そんなあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

遙か頭上の天井から下がるシャンデリアは、華美でなく、しかし、その存在を確かに示している。

その下に長く続く白い大理石を敷き詰めた回廊を、ユウはヴィンセントの背中を見て進んで行く。

言葉を交わすことなく、ただ、沈黙を保って。

永遠に続くかと思う程のその先に、重厚な観音開きの扉が姿を現した。

「騎士団、ヴィンセント・クリストファー・ロイス、国王陛下に謁見のお許しを頂きたく参りました」

ピンと張りつめたヴィンセントの声に、ユウの身が、ぴくり、と縮こまる。

「よい、許可する。入れ」

威厳のある声が、向こう側から響いた。

「大丈夫。陛下は判って下さる」

彼は不安げにしているユウに向かってささやいたあと、表情を戻し、扉を、ずい、と押し開けた。

「この度はお目にかかる機会を頂きましたこと、ありがたく存じます」

「よい、ヴィンセント。……して、その娘が？」

「はい」

俯いたままヴィンセントの後ろにいたユウを射る視線に、彼女は息をすることさえ許されないような感覚に陥った。

「娘、顔を上げよ」

「さあ、ユウ」

グインセントに背中をそつと押され、言われたままに顔を上げ、目の前の威圧に向かう。

その先には、中央に男と女が並んで椅子に掛け、その両側に一人ずつ男が立っていた。

（この方が、国王陛下……。じゃあ、あちらが王妃様？）

ユウはそろそろと前へ足を進めた。

「名は？」

「……ユウ、サカキ、と申します」
恐る恐る口を開く。

「異世界から来たと？」

「そのようです。気が付いたら、森の中に、居ました」

じつと心の底まで覗き込むように見た後、国王は、自身の右に控えていた男に声をかけた。

「ダリル。どう思う？」

「はっ。……見たところは、“王家の森”の結界を超えて侵入したようには思えませんが」

「エディ。お前はどうか？」

「陛下や殿下方に危害を加えるようには見えません。……少なくとも、今は」

王妃の左にいた男が国王に進言し、スツとその目を細めてユウを見る。

その視線に、ぞわり、とユウの胸が騒いだ。

押し潰されるような感覚が全身にまわりついて、次第に呼吸が

浅くなる。

エディ、と呼ばれた男が国王に近寄り、耳打ちをするような姿を視界に捉えた直後、違和感に耐え切れず、ユウががくりと膝をついた。

「ユウ？ どうした？ 顔色が良くな……」

ユウのすぐ隣にいたはずのヴィンセントの声が、彼女の意識からすうっと遠くなっていった。

2・(後書き)

仕事で失敗して凹んじゃったので(?!)(、ちょっと早めにUPです。

さて、お話は、“ユウ、国王様との遭遇”。

『国王様なのに、危険視している人物と直接逢っちゃうのかい?』
な〜んで、

カタイこと、言いつこナツシング(↑Σ(・ω・ノ;)ノ?!!)
でお願いします。

(→実は、ついさっき、これに気づきました。)

気力が持ったら、明日か明後日に、もう一話、UPしたいなあ〜
などと、

不謹慎なことを悶々と考えております。

さて、どうなることやら…」(へ」」

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。
そんなあなた様に、最大級の感謝を。

諒でした。

気が付くと、ユウはベッドの上にいた。

（元の世界では倒れたことなんて一度もなかったのに……）
ゆっくり身体を起こして、こちらに来てから随分と弱くなった、
と嘆くように、ふう、と大きく息を吐く。

「お気づきになりましたか？」

いつからか部屋にいた明るい栗色の髪の女性が、こちらを向いて
ニコリと微笑む。

「宜しければ、お水はいかがですか？」

彼女は水差しからグラスに水を注ぎ、ユウの前に差し出した。

「……ありがとうございます」

「お目覚めになられたこと、お伝えして参りますね」

そう言って、彼女は部屋を出て行った。

よく冷えた水を注いだグラスは、崩れそうになった気持ちを留め
てくれた。

一口含むと、それは乾ききっていた身体に染み込んでいった。

「失礼するよ」

声の方向を見ると、開かれていたドアに寄り掛かるように、身な
りをきちんと整えた一人の男が立っていた。

ユウが視線を戻し、何も言わずにいると、その男は不服そうに近
寄ってくる。

「口がきけないのか？」

顔をグイと下から押し上げられ、強引に視線を合わせられる。

ユウの目の前にあった深い藍色の瞳は、何故か驚いたような表情を浮かべていた。

「殿下、どうなさいました」

聴きなれた声が、耳に届く。

「……ヴィンス、か。では、やはり、この娘が？」

殿下、とヴィンセントに呼ばれた男は、スツと目を細めた。

「ユウ、です。殿下」

「……ふん。えらく気にかけてやっていると聞いたが？」

「当然でしょう？ 言葉も生活も全く違う世界に、突然放り出され
たんですから」

「……それだけか？」

整った顔が、ずいつ、とユウに近づく。

パチン、と、突然部屋に響いた乾いた音は、その空気を一瞬で入れ替える。

音の源は、男の左頬に飛んだユウの右手だった。

「……何をする」

「さつきから何なんですか、貴方？ ヴィンスに殿下と呼ばれるくらいなんですから、きつとお偉い方なんだろうな、とは思いますが」
ユウは自分のとった行動に自分で驚きながらも、ムツとした気分のまま言い放った。

瞬間、男が豪快に笑いだした。

「え？」

何が起きたのか全く分からず、ユウはヴィンセントに助けを求めるような視線を送る。

「……殿下。ユウが困っていますよ？」

「ふっ。ヴィンス、お前、面白いものを拾ったな」

「ルー」

涙目で皮肉を投げた、自身が殿下と呼ぶ男を、ヴィンセントはしかめ面で見ている。

ひとしきり笑い、ユウの方へ向き直った男が、その薄く整った口を開く。

「私はこの国の王太子、ルーカス・レイモンド・ベイルシャルだ」

「ユウ・サカキです」

「ユウ、か」

「はい」

「……良い名だ」

ルーカスは、くしゃりとユウの前髪をかき上げて、露わになった額にその唇を落とした。

途端に茹で上がるようにユウの顔が赤くなる。

「……なっ！」

抗議をしようと口を開くも、パクパクと動くだけで、声にならない。

「邪魔したな」

そう言っ、ルーカスは部屋を出て行った。

「大丈夫ですか？ ユウ」

真っ赤になっているユウの顔を、ヴィンセントが覗き込む。

「……無理です」

その顔を見られたくないユウは、慌ててシーツを頭からかぶり込む。

「……すみません」

「ヴィンスが謝ることないでしょ」

「ルーは……王太子殿下は同じ歳でね、兄弟同然に育ったんです」
ユウは包^{くる}まったシートから、頭だけをスポツと出した。

「ルー、アート、レンと私。歳が近かったから、小さい頃は、四人いつも一緒でした」

どこか悲しげなヴィンセントに、キリリと彼女の胸が苦しくなる。
「やはり、きちんと伝えなかったのが、間違いだったのかもしれない」

彼の、消え入りそうな声が聞こえた。

「私のせいだね、ヴィンスの大切な人たちを怒らせちゃったの。ごめんなさい」

（ヴィンスは、何も、悪くない。悪くないのに、何故、こんなにも辛い思いをしないといけない？）

もう何度目かの自責が、ユウを罪悪感に縛り付ける。

「ごめん、ね。ヴィン……」

ユウがそこまで口にすると、グイ、と引き寄せられた。
ぽすん、とヴィンセントの胸に抱きとめられる。

「ユウは何も悪くないんだ。だから、何も気にしないで」

大きな手で、そつと背中を撫でられる。

まるで陽だまりのように温かい。

「慣れない馬車は疲れたでしょう。さあ、今日は、もう、お休み」
柔らかなヴィンセントの声が呪文のように響き、ユウは瞼をゆっくり下ろした。

3・（後書き）

今日のユウちゃん。

王様の次に、王子様^{オレ}に遭遇。

…この方、当初は、こんなキャラ設定じゃなかったのですが…あれ？
何処で間違えた????

こんなおバカにお付き合いいただき、ありがとうございました。
そんなあなた様に、最上級の感謝を。

諒でした。

ヴィンセントが自身の執務室に戻ると、そこにはルーカスがソファに腰かけて待っていた。

「遅かったな？」

ルーカスがニヤリと笑いながら部屋の主を見る。

「ご用であれば、こちらから伺いましたのに……」

彼は溜息を吐いて、あえて無愛想に返事をした。

「……ヴィンス」

「なんででしょう？」

「お前、あの娘をどうするつもりだったんだ？」

「どうするつもり、とは？」

「“王家の森”で拾った後、匿って、その後、どうするつもりだったんだ？ と訊いているんだ」

ルーカスはいたく真剣な眼差しを送っている。

「もう少し調査して確証が付き次第、それ相応の対応をするつもりでしたが……それが何か？」

「ふん。で、あいつはどうなんだ？ 侵入者なのか？」

「どうやらそうではないようです。本人が言うことを信用するならば、異世界からきた、と。何者かに召喚されてきたようです」

「召、喚？ 禁忌の術じゃないか！」

「はい。突然白い光に包まれて、気付いたら“王家の森”にいた、と。当初は、言葉も通じませんでした。今は魔道具でどうにか会話はできますが……」

「一体、誰が……？」

「わかりません。時間を見て調査を進めていますが、まだ手掛かりらしきものは何も……」

重く垂れこめた空気が部屋に漂う。

「それに、彼女について心配事が。アートのことがあり、保護を拒否されました。ゆくゆくは……とは思っていましたが、今はまだ、この世界で一人で生活していくことは不可能と思われます」

「アート、か」

「レンもアートと同じ考えのようです。私がもっと早く話していれば、こんなことには……」

自責の念に駆られ、思わず握り締めたヴィンセントの拳が、ブルブルと震えていた。

「……何か方法がないか考えてみよう。あいつにはまだ、監視が必要だ」

そう言ってルーカスは立ち上がり、ドアノブに手をかけた。

「そうだ」

ドアを開け、部屋を出ようとしていたルーカスが、ぴたりと立ち止まる。

「ヴィンス。あんまり自分を責めるなよ？全部が全部、お前のせいじゃないからな？」

左手をひらひらと振りながら、彼は執務室を後にした。

4・（後書き）

ちよつと短めでしたが、いかがでしたでしょうか？

男の子たちの、内緒話（?!）。

ご意見・ご感想、その他諸々、お待ちしてます♪

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
そんなあなた様に、茹だるように熱い感謝を。

諒でした。

よほど疲れていたのか、ユウが再び気が付いた時には、既にあたりは明るくなっていた。

「おはようございます」

昨日とは違う女性がタオルとお湯を張った桶、布をかけた少し大きめのバスケットをワゴンに乗せて部屋に入ってきた。

「ご気分はいかがですか？」

落ち葉のような色の髪の女性は、ニツコリと笑う。

「ありがとうございます。おかげさまで、もう、大丈夫です」

「よかった。このあと、王妃殿下がこちらにお見えになるそうです。お支度のお手伝い、いたしますね？」

そう言うとお湯で硬く絞ったタオルを手に、ベッドへと近づく。

「なに、を？」

「さ、急いで急いで」

鬼気迫る彼女のその雰囲気、ピシリ、と固まってしまったユウは、あれよと言う間に身ぐるみ剥がされ、数分のうちにすっかり整えられてしまった。

ユウは、彼女のあまりの手際の良さに衝撃を受け、部屋で一人、ただ呆然と座っていた。

昨日着てきた高校の制服の代わりに、と着せられた、よく見ない

とわからないくらい淡いベージュピンクのリネンのワンピースは、とても着心地が良かった。

（“罪人”^{つみびと}に、こんな待遇って、いいの？）

ぼんやりとしながらも、そんな疑問がふつ、と浮かび、押し寄せ、不安に精神が震えた。^{こころ}

ドアをノックする、乾いた音が耳に飛び込む。

気持ちを引き戻して立ち上がりそちらを向くと、ヴィンセントがドアを開けたところだった。

彼はユウの姿を見ると驚いたような表情をし、しかしすぐにふわりと笑みを浮かべた。

「おはよう、ユウ。ああ、少し顔色が良くなったようだ。よく眠れましたか？」

「ありがとうございます。おかげさまでぐっすり眠れました」

少し事務的に言葉を返す。

（もう、頼っては、いけない）

ユウはまた泣きそうになる自分を叱咤する。

開けられたドアから、昨日、謁見の間で見かけた王妃と、王妃によく似た面立ちの女性、そして、昨日ユウの傍にいた女性が続いて部屋に入ってきた。

「ユウ殿、と仰いましたね？ お加減はいかが？」

王妃が微笑みながらユウに訊ねる。

「ありがとうございます、王妃殿下。おかげさまで、もう、平気です。お心遣い、ありがとうございます」

片膝をつき深々と頭を下げ、感謝の気持ちを伝える。

「そう、よかったわ。あなたには、本当に可哀想なことを……。心休まることがなかったでしょう。さ、顔を上げてちょうだい」

王妃は、ユウの傍らに立ち、そつと肩を抱いて立ち上がらせた。

「ナディア、お茶をお願い」

「はい、すぐご用意いたします」

ナディアと呼ばれた、昨日ユウの世話をした女性が、後ろに下がって茶器の用意を始める。

「さ、ユウ殿。おかけになって？ 今日、あなたにお願いがあるの」

そつと背中を押され、ソファに座る。

「私の娘、フィオナです」

向かいに座った王妃は、自分の隣に座った愛らしい女性をユウに紹介した。

「フィオナと申します。宜しくお願いいたしますね？」

「ユウ・サカキです。こちらこそ、宜しくお願い申し上げます、フィオナ様」

ユウがフィオナに挨拶すると、彼女はそれに応えるように微笑んだ。

「失礼いたします」

ナディアがお茶の支度を済ませ、それぞれに給仕した。

「早速だけれど」

円卓を囲み、王妃がお茶を少し口にした後、話し始めた。

「お願い、というのは、フィオナの事なの」

憂愁の色を浮かべる王妃の顔を、ユウはじつと見つめる。

「歳の頃合いからして、もうそろそろどちらかに……と思っているのだけれど」

「お母様つたら、またそのお話ですの？ わたくしは、まだ、嫁ぎたくありませんっ！」

フィオナがふい、とそっぽを向く。

「……お恥ずかしながら、この子はずっとこんな調子で。お作法だけでなく、と思うのだけれど、侍女の人手が足りなくて」

「で、私が？」

「ええ。いかかしら？」

「王妃殿下、お言葉ですが私には無理です。礼儀作法もなっていない、得体の知れない娘ですよ？」

「ユウ！」

ヴィンセントの鋭い声が部屋に響く。ユウは、あえて聞き流し、言葉をつづけた。

「フィオナ様に何かあつてからでは遅いとおもいませんか？ 第一、なぜ、私なんかを？」

「私が推薦した」

その声に振り返れば、ルーカスが開け放たれたドアにもたれるように立っていた。

「お前はフィオナにとって、よき侍女になる。そう推薦したのは私だ。それでは、理由にならないか？」

「王太子、殿下……」

笑みを浮かべながら近づいてくるルーカスに、ユウはグツと唇を噛み締めた。

ヴィンセントはそんな二人の間に、口をはさむことはなかった。

5・(後書き)

いつもありがとうございます。

さて、また一つ、前に進みました？

ユウ、侍女として、就職が決まりました。

この就職難のご時世、仕事があることは、素晴らしいことです。

(→うおいつ、それ、先月までの自分やろっ？！Σ＼(´ー´)；)
(

ここまでお付き合いくださったあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

かくして、ユウはフィオナに仕える侍女として王宮へ生活の場を移すこととなり、ひとまず見習いとして、ナディアから作法などの教育を受けることとなった。

「はい、今日はここまで。努力は認めるけれど、結果につながらないとかなり厳しいわね」

王宮に連れてこられてから五日。ユウの、その熱心な心意気は褒めるに値するものだが、そそっかしい性格が災いして、どうも空回りしてしまうらしい。

「すみません。明日こそ、ちゃんとできるように頑張ります……」
手を滑らせて落としてしまった皿のカケラを拾いながら、ユウはうなだれた。

「そろそろ、頑張ろう、なんて気を張るの、やめになさいな？ あなたは気負い過ぎているわ。もっと、気持ちを楽に持ちなさい」
ナディアは、いたわるようにユウに声をかけた。

「大丈夫。あなたはとても努力家だから、気持ちさえ落ち着けば、何でもこなせるようになる。ルーカス殿下があなたを推挙なさったのは、だからなのよ？」

「ナディアさん……」

今にも泣きだしそうなユウを見て、ナディアがふわりと微笑む。

「ほら、そんな顔、しないの」

ポン、とユウの背中をナディアの手が押した。

「ユウウっ。どお？ 頑張ってる？」

落ち葉色の髪をふわりと弾ませ、一人の少女がユウのもとへと駆け寄ってきた。

「リアさん……」

「なあに、また落ち込んでるの？」

リア、と呼ばれた少女は、ユウの様子に呆れたように呟いた。

「私の時なんか、もつと凄かったんだから。ユウの失敗なんか、失敗のうちに入らないわよ。」

「そうね、あなたは特別ひどかったわね、リア。さすがの私も呆れて物が言えなかったわ。お皿は一日で何枚割ったかしら？ 洗濯するのに渡したシーツも、気が付いたら、ボロ布だったし」

「わかってるんですけど、ナディアさん。ちよつとくらい、かばってくれたって……」

「あら、事実じゃない。嘘はいけないわよ。ね？ ユウ。」

突然ナディアから話を振られ、二人の勢いに呆然としていたユウは慌てて「はい」と答えてしまっていた。

「ユウまで……」

「そんなだったリアも、今じゃどうにか仕事ができるようになってるの。だからユウ、心配しなくても大丈夫よ。さあ、今日は、おしまいにしましょう。ゆつくり休んでね」

落ち込むリアを後目に、ナディアはユウに^{おぼろ}いの声をかけて、部屋を出て行った。

「……リアさん、ごめんなさい」

俯いたまま、ユウはリアにぼそりと謝った。

「ん？ 何？ ユウが私に謝らないといけないことなんてないわよ？」

「あの、さっきの……」

「ああ、あれ」

リアはクスリと笑って、相変わらず今にも泣きそうな顔をしたユウの肩を抱き寄せた。

「ナディアさんも言ってたけど、事実だから。でも、あの数えきれない失敗があつて、今の私がいるの。ま、未だにマトモな仕事はできないけれど、ネ。」

そう言つて、ユウの背中をゆっくりとさすつた。

「大丈夫。ユウはとくても優秀よ？ ルーカス様は、あれでも人を見る目がありなの。今日だって、よく頑張つてたじゃない？ こっそりお二人がのぞきに來て、安心したように帰つてらしたわよ？」

「お二人つて？」

「ルーカス様と、ヴィンセント様。ホントに短い間だけど、ユウが頑張つてるところ、見てらしたわ。お二人で顔を見合せて、ホッとしたような表情されて。執務中に抜け出てきたような感じだったわね、あれは。」

ウフフ、と笑うリアの隣で、少し寂しそうな表情を見せたユウだった。

ユウが王宮に移って、一ヶ月が過ぎた。

リアからルーカスとヴィンセントが様子を見に来ていたと告げられたあの日以来、余計な力が抜けたユウは、乾いた大地が雨水を吸い込むかのような勢いで仕事を覚え、侍女として恥ずかしくないほどの成長を遂げた。

「ユウ、こちらへ」

ナディアは、取り替えたシーツを洗濯場へ運び終えたユウを呼びつけた。

「ご用ですか？」

呼ばれた理由がわからず不安げなユウに、ナディアは優しく微笑んだ。

「よく頑張りましたね、ユウ。あなたには、今日から、正式にフィオナ様の専属侍女としてお勤めをしてもらうことになりました。おめでとう」

そう言って、フィオナの瞳の色と同じ紫のお仕着せをユウに手渡した。

「さ、早く着替えていらっしやい。フィアナ様が、あなたとお話するのを、ずっと待っていていらしてよ？」

「……はい、ありがとうございます！」

薄っすらと涙を浮かべたユウは、ナディアに深々と頭を下げ、自分に与えられた部屋へと戻っていった。

「良かったですわね、ヴィンセント様。ルーカス殿下のお目も、あながち節穴ではなかった、ということですね。」

「ナディア女史？ 殿下への不敬罪に当たりますよ？」

ユウが走り去った逆の方向から、何の気配もなく現れたヴィンセントは、苦笑いしながら自身を振り返ったナディアをたしなめた。

「あら。それは失礼いたしました。そんなことくらいでお怒りになる殿下ではないと思っていたのですけれど」

二人は互いに顔を見合わせて、どちらからともなく、和やかな笑みを浮かべた。

しかし、その空気も長くは続かなかった。

「ユウは……あの子は、とても強い。とても強く見える分、ひどくもろくて、弱い」

「そうですね。とても頑張り屋さんで、何に対しても必死に、懸命に立ち向かう。でも、その分、小さなきっかけで壊れてしまいそうですわ」

「いつかユウは……あの子は、すすんで自分自身を犠牲にしそうな気がするのです……」

もうとつくに姿の見えなくなったユウの走って行った方を見る厳しい表情のヴィンセントの横顔を、ナディアは哀しげに見遣った。

部屋に戻ったユウは、ナディアから渡された紫紺のお仕着せを眺めて、何とも言えない複雑な表情をしていた。

（私、“罪人”扱いなのに……。フィオナ様のお傍にお仕えしてもいいの？）

実際のところ、ユウ自身、ルーカスの一言であれよあれよと訳の

解らぬうちに侍女見習いとなった現状の全てを、納得して受け入れていたわけではなかった。

（ヴィンスは……どう思う？）

一ヶ月前にここに連れてこられ、国王陛下に謁見した翌日、侍女見習いになることが決まってから、ユウは、ヴィンセントと一度もまともに顔を合わせていなかった。

以前、リアが言っていたように、ヴィンセントは、ユウのことを見ていたのかも知れない。

だが、ユウ自身は、一度もその姿を見かけることはなかった。

ここに来てから顧みることのなかったヴィンセントのことを想った途端、張りつめていた緊張がブツリと途切れ、ボロボロと大粒の涙が床を濡らした。

「……いけ、ない。泣いちゃ、負け。私、一人でも、ガンバらなくちゃ……」

無意識に漏れた言葉に、慌てて口元を押さえても、あふれる涙は止まることがなく、次第に言葉とも取れない嗚咽に変わった。

「……ユウ？　いるのか？」

暫く時間が過ぎて、ようやくユウの涙が落ち着いたところに、ドアの向こう側から、ルーカスのユウを捜す声がした。

（見つかったは、イケナイ）

息を潜め、部屋の隅に小さくなって、その人がこの場から離れていくことを祈る。

が、しかし、その願いは空しく、カチャリ、と小さな音を立てて、

ドアノブが廻り、ユウの身体は、その微かな音にさえ、びくりと揺れた。

「ユウ……」

ルーカスの、感情が揺れた声に、ユウはゆっくりと顔を上げた。

「……何故、泣いて……？」

声の主の、驚きを隠さないその顔は、酷い痛みに耐えるかのようにも見え、ユウは、キュツと唇を噛んで、その視線から逃れるように目を逸らした。

次の瞬間、ユウの視界は遮られ、身体は強い力に閉じ込められた。「辛いなら、どうして言わない？ お前は、もっと、人を頼れ。でなければ、お前が消えてしまう……」

頭の上から響く苦しげな声に、おさまりかけたユウの涙が、再びあふれだした。

「……殿下」

ヴィンセントは、部屋の隅で壁を向いてうずくまる、ようやく見つけた己が主に声をかけた。

「ヴィンス……か。捜させたか？ すまないな」

立ち上がり振り返ったルーカスの腕に抱えられていた者の姿に、ヴィンセントは、一瞬、心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われた。

「ど、うして、ここに……？」

「フィーが、ユウを待っていてな。なかなか来ないから、迎えに来たんだが……」

腕の中でクタリと力なく自分にもたれかかるユウに目を落とし、ルーカスは続けた。

「随分と気を張っていたようだ。疲れが出たんだろう。今日は一日、休ませてやってもいいんじゃないか？」

常に冷静で変わらない判断を下すとの声高き次期王が、ユウを見るその瞳に今までに見せたことのない色を滲ませ、それに気づいたヴィンセントは息をのみ、ただ、ギリツと唇を噛んだ。

「そ、うですね。この一ヶ月、彼女はよく頑張っていましたし。では、そのようにフィオナ様にお伝えして参ります」

蒼白^{あお}い顔で俯いたまま、ヴィンセントはようやくそう言つと、くると踵を返し、さっさとその場を立ち去った。

「ヴィンス！」

回廊を歩くヴィンセントが自分呼び止める声に振り返ると、そこには、このひと月の間、かの異界の娘に働いた罪を償うべく刑を受けていたステイアートが立っていた。

「アート……」

「どうした、ヴィンス？ 顔色が悪い」

「いや、何でもない……」

ももごとくぐもった声で話すヴィンセントに、ステイアートは眉を顰めた。

「大丈夫か？ また、一人で厄介ごとを抱えてるんじゃないのか？」
気まずそうに目線を逸らせる幼馴染を前に、ステイアートは肩をガチリと掴んだ。

「なあ、ヴィンス。そんなに、俺が信用ならないか？ お前、昔っからそうだろう？ なんで、話してくれない？」

苦しそうに告げるステイアートに、ヴィンセントは、顔を上げる
ことができなかった。

「私は……私がしたことは、正しかったのだろうか……」

数分の間の静寂の後、ポツリ、と零したヴィンセントの呟きに、ステイアートはあっけらかんと答えを返した。

「お前が信じたのなら、それは、間違いではなかったんじゃないのか？」

「……アートにも酷い思いをさせた」

「何言つてんだ、ヴィンス。あれは、俺の暴走だよ。お前が止めてくれないければ、あの娘を、俺は亡き者にしていたかもしれない。だが、一時の感情で」

ハツと顔を上げたヴィンセントの前に、いつにも増して真剣な表情のステイアートが立つ。

「一ヶ月。長いようで短かったが、俺にとってはいい時間だったよ。すまなかったな、ヴィンス。お前の信じたものを、色眼鏡を通して見て、自分の感情のままを突き通した。もっと、冷静になって、お前を信じて、支えるべきだったんだ。なのに、俺は……」

ステイアートの噛み締めた唇から、薄っすらと血が滲む。

「アート……」

「大丈夫です、団長。復帰まであと二週間、申し訳ありませんが、もう暫く、ご迷惑をおかけします」

突然口調がガラリと変わり、ステイアートは、右手の拳を左胸に置き、首を下げて、騎士団特有の最敬礼をとる。

そんな彼を、ヴィンセントは苦しげに見つめた。

「そんな顔、するなつて。お前がそんなで、どうするよ？ レンも説得しなきゃならないんだろう？」

再び砕けた口調に戻ったステイアートは、顰め面のヴィンセントの胸を右の拳でトン、と小突く。

「どうして、それを……」

「あのなあ、何年の付き合いだ？ お前の顔には、全部書いてあるよ。」

ニヤリ、と笑う、気心知れた幼馴染に、ヴィンセントの硬い眉間の皺が、ふ、と解れた。

8・（後書き）

” お帰り、アートくん ” の巻。

暴走アートくん、1か月のお役目を終えてきました。

本来の彼は、ヴィンス、好き好き（↑ B L な意味ではなく…）
こういう奴です。

幼馴染4人衆の中で、1つ年上なんです、彼（↑ 確か…）。
ちょこっとお兄さん気取りな、アートくんなのでした。

ここまでお読みくださったあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

開け放たれた窓から、心地よい風が、カーテンを揺らして吹き込んでくる。

穏やかな太陽の光は、ベッドで横たわるユウの頬を、優しく包んでいた。

「……偉大なる、魔女……」

深い色の瞳に映るユウのあどない寝顔に、ベッドの脇で、スツ、と目を細めた。

「あ……。ヤダ、私、また？」

ユウが目を覚めたのは、正午を少し過ぎたころだった。

「起きたかい？ 殿下が、今日は休めってさ」

中庭に出られるように通じた窓から、一人の男が部屋に入ってくる。

「あなたは……」

ユウは、その姿を見て言葉を噤んだ。

恐怖が無かった訳ではない。

それより、何故、この男がここににいるのかに、ただ、純粹に驚い

た。

「すまなかった、な」

中庭から現れた、ひと月前、この世のものとは思えないような形相でユウに襲いかかった男、ステイアートが、ユウに頭を下げた。

「ステイアート、さん？」

「アート、でいいよ」

「アート、さん……」

「もう暫く、謹慎なんだ。まあ、自業自得なんだが……」

眉を八の字に下げ、困ったように笑う目の前の男を、ユウは、不思議そうに眺めていた。

「あれから、よく考えたよ。それしかすることがなかったと言えば、それまでだけれど」

ステイアートは、そこで一度言葉を切った。

「どうして、ヴィンスがあんなに君に肩入れしたのか。……あいつは、君を、自分に重ねてしまったのかもしれない」

ポツリとこぼす俯き加減のステイアートをじっと見つめるユウを、顔を上げたステイアートの視線が捕まえた。

「……あいつ、優しいだろ？ 他人を、拒絶、できないんだ。今までにもその優しさに付け入る奴がいてさ。そのたび、ヴィンスは精神も身体も、ボロボロになってた。小さい頃からずっと見てきたから、君も、その類の人間だと思った。俺は、“侵入者”を捕らえる以前に、ヴィンスを護りたかった。本当にすまなかった」

ギョツと眉間に皺を寄せ、ステイアートは、苦しそうに言葉を紡いだ。

そんなステイアートを、ユウは、黙って見つめた。

「あいつ、俺やレンと逢う少し前まで、街の外れの孤児院に居たんだ。そこがどんな環境で、どんなふうに育ったのかはよく解らないけれど、ヴィンスは未だに、誰かを求めることも、拒否することもできない……」

ユウは、突然聴かされた話の内容に、息を詰めてステイアートを見つめ続ける。

「自分の存在をさ、認めてやれないんだ。居てもいなくてもどうでもいい存在だと……いや、むしろ、居ない方がいい、と、思ってるようだね」

そこまで聴かされたユウが、微かな声で、ぼつりと「ああ、だから……」と小さくこぼした。

「だから」？ 何か、あった？」

「はい。あの日から三日後に目を覚ました時、私、自分を否定する言葉を口にしました。そうしたら、ヴィンス、すごく怒って……」

「ああ、うん、そうだね。そういうの、あいつ、血相を変えて怒る。俺達にでもそうだよ」

ステイアートはナイトテーブルに置かれていた水差しからグラスに注ぎ、ユウに持たせた。

「あいつは、そういう存在は、自分だけでいいと思ってる。でも、奴も、そういう存在じゃ、ないのにさ……」

ユウの、グラスを持つ手に、僅かに力がこもる。

「あいつは、何も、言わない。いつも、自分だけでどうにか片を付けようとする。君のことだってそう。俺のこともそう。全部、一人で抱えて……」

ステイアートの、何時しか強く握られた拳が、微かに震える。

ユウは、手渡されたグラスをテーブルに戻し、そつと、その手を震える拳に重ねた。

「君……」

「アート、さん。……ごめんなさい」

ステイアートの目には、今にもこぼれそうな位に涙をためた、ユウが映っていた。

「私がいなければ、アートさんは、牢屋に入れられることもなかった。ヴィンスが辛い思いをするのを判っていて、あなたが苦しむこともなかった。今回の事は、全て、私が原……」

「待て、違う。君が悪いんじゃない」

ステイアートは、咄嗟に自身の拳に重ねられたユウの手を握りしめ、その言葉を遮り、ユウは、驚きのあまり、瞬きを忘れた。

「ヴィンスは、言っていないかったか？ 君は、“召喚”されてきたのだと。全ての根源は、罰せられるべきなのは、禁忌の術を用いた“召喚主”だ。召喚された人間に、何の罪もない。君は、とんでもない事件に巻き込まれてしまった被害者なんだよ」

そこまで一気に話すと、ステイアートは、ふわりとユウの頭を撫でた。

「本来なら、謹慎中は大人しくしていなければならんだが……陛下がね、俺に特別な許可を下さった。君をこんな目に遭わせた原因を捜すよ、ヴィンスを援けて。約束する。だから、君は、もう苦しまなくていい」

「アートさん……」

「君、たつたひと月で、フィオナ様の侍女になったんだってね？ 凄いじゃないか。明日から、しっかり頑張るんだよ？ フィオナ様はお優しい方だから、きつと善くしてくださる。君もそれに応えるんだ。ヴィンスが、陛下や殿下方に応えるように」

グズグズと鼻を鳴らしながらも、ユウがこくりと頷くのを見て、ステイアートは微笑んだ。

「さあ、もう少し休みなさい。明日からが、大変だから」
ユウの身体を横たえさせ、シーツを引き上げそつと掛けるステイアートに、彼女は、「はい」と小さく答え、瞼を閉じた。

9・（後書き）

アートくん、ユウと仲直り、の巻。

アートがユウの事を目の敵（？）にしていた理由、伝わりましたでしょうか？

大好きな弟を庇いたかったお兄ちゃんの立ち位置？

… なんだかよく解らないことを言ってますね、私。すみません。

今日もここまでお付き合いくださったあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

夕焼けが美しい、王城の中庭にある東屋のベンチに、ユウはただぼんやりと座っていた。

赤く焼けつくような夕陽が、ユウの頬を撫で、その色に染めている。

小高い丘の上にある王城からは、城下の街が一望でき、また、中でもこの中庭の東屋からは、遮るものなく夕日が地平線へと沈みゆく様を眺めることができたので、ユウは、これまでもこっそりここを訪れていた。

「貴様、ここで何をしている！」

不意に静寂を切り裂くような怒鳴り声が響き、ユウは、聴き覚えのあるその声の主に視線を向ける。

「ウォーレン、さん？」

「ここで何をしていると、訊いているんだ！ この“罪人”が！」
そう言うが早い、ウォーレンは、ユウの左腕を掴み、捻じり上げた。

「いたっ！」

不快な汗がユウの額に滲む。容赦なく力が加え続けられている左腕は、今にもボキリと鈍い音を立てあさっての方向を向きそうな勢いだ。

「ウォーレン！ 何処だ！」

「殿下！ 来てはなりません！」

ウォーレンの意識が逸れ、腕にかけられる力が緩んだ隙に、ユウ

は掴まれた左腕を解放するべく、必死の抵抗を試みた。

が、しかし、日々の訓練で鍛えられた成人男性の力には到底敵わず、ウォーレンは、再び、ユウの動きを封じ込めてしまった。

「は、な……してっ！」

痛みで滲む涙も気にせず、ユウはウォーレンを振り返り、キツと睨み付けた。

「ウォーレンっ！ お前、何をしている！」

正面からした声にユウが視線を戻すと、そこには、王女フィオナによく似た面立ちの男性が立っていた。

「殿下！ 早くこの場を離れてください！ こいつは……！」

「あなた、フィオナの侍女殿、ですね？」

現れた男性の言葉に、ユウはこくりと頷いた。

「いゝっ?!」

ウォーレンが殿下と呼ぶ男性は、おかしな音を発したあと驚きの表情を浮かべるウォーレンの手を勢いよく叩き払い、ユウの眼尻に浮かぶ涙を、その手でそつと拭った。

「お前、フィオナ様の……?!」

「はい、昨日までは見習いでしたが……」

赤く痕の付いた左腕をそつとさすりながら、ユウはウォーレンを見た。

ウォーレンは、信じられないといった表情のまま、あわあわと立ち尽くしている。

「……お前、騎士団長から何も聞いていないのか？」

そんなウォーレンを尻目に、フィオナによく似た男性は、ユウに向き直った。

「失礼しました、侍女殿。私は、ジェラルド。ジェラルド・ベイルシャール。フィオナの双子の兄です」

「フィオナ様の、双子のお兄様、ですか。……あ、私、ユウです。ユウ・サカキと申します、ジェラルド殿下。お救け下さり、ありがとうございます。」

事の進展にようやく追いついたユウは慌てて礼をとった。

「大丈夫ですか？ 申し訳ありませんでした、ユウ殿。怖い思いをなさったでしょう？ あなたがこの城に來られてすぐ隣国へ出ておりましたね。昨日、ようやく戻ったところです。そのウォーレンも私の供として出ておりました。知らなかったとはいえ、なんとお詫びを申し上げればよいか……」

ジェラルドは、ユウの赤く腫れた左腕にそつと手を添え、目を閉じて何か小声で呟く。

すると、添えられた手が、ぽう、と仄かに光を持ち、ユウの腕の赤みは嘘のように消え去った。

「あ……」

「私の力では、完全に、とはいきませんが、ひどい痛みはなくなっただけです。いかがですか？」

「ありがとうございます、ジェラルド殿下。もう痛くないです」

ユウはジェラルドに向かって深々と頭を下げた。

「良かった。当然のことでしたから、どうぞお氣になさらず」

にこり、と優雅に微笑むと、ジェラルドは言葉をつづけた。

「……ところで、この男、どういたしましょう？ あなたのお氣の済むようになさってください。お決めになられた処分に、私は異議を申しませんから」

と、未だ呆然と立ち尽くす自身の従者を呆れた眼差しで見遣り、溜息を吐いた。

「え？ あ、いえ、あの……私、そんな……」

ユウが困ったような顔を見せ、ずり、と一歩後ろに引き下がる。

そこに、「ジェイ殿下はこちらか？」と二人連れの男性が現れ、前を歩いていった男性の胸に抱きこまれるように、彼女がぶつかつた。

「きゃ……」

「おっと……。大丈夫ですか？」

「ああ、申し訳ありません、アドルフ殿下。さ、ユウ殿。こちらへ」
ジェラルドはユウの手を取り、彼女を引き寄せ、自身の背中に隠した。

それまで呆然と立っていたウォーレンも、いつの間にかジェラルドの傍に就いていた。

「……で、どうなさいました、アドルフ殿下。私に何か？」

ジェラルドは目の前に立ちながらも、視線の合わないアドルフに問いかけた。

「ん、ああ、いや。特別、用があつてと言っわけではなかったのだが、明日の朝早くに出立することになりましたので、一言、と……」
声をかけられ、我に返つたように話し出すアドルフであったが、やはり、視線はジェラルドと合うことはなく、彼の向こう側にいる、ユウを見ていた。

「そうでしたか。それはご出立前のお忙しいところ、わざわざありがとございました。こちらも一ヶ月もの長い期間、大変お世話になりました。どうぞ、無事ご帰還されること、お祈りしておりますよ」

にこやかにジェラルドが謝辞を返すと、アドルフはようやく自身を追ってきた王子に視線を合わせ何か言おうと開いていた口を真一文字に噤んだ。

「アドルフ殿下、明日の準備がありますので、そろそろ……」

後ろに控えていた従者が小さく伝えたと、アドルフは「うむ」と呟き、ジェラルドに向き直った。

「では、我々はここで」

不機嫌そうにくるりと踵を返したアドルフとその従者は、そのまま振り返ることなく、中庭を後にした。

「ジェラルド殿下。先程の方は……」

姿が見えなくなってから、ユウはジェラルドにそっと訊ねた。

「隣国、カーエンタールの王太子、アドルフ・カーエンタール。あなたは、できるなら関わらない方がいい。とても厄介なヤツですから」

ジェラルドは、フツと笑ってユウに告げた。

「さて、我々もこの辺で。次にお逢いした時に、ウォーレンへの処罰、お伺いしますからね？」

「……！」

「で、殿下っ?!」

慌てる二人を見て見ぬふりをして、ジェラルドは元来た道を戻り始め、ウォーレンはそんな主を冷や汗をかきながら追いかけて行った。

ゆっくりと一人で夕陽の沈んでいくのを眺めるつもりでここに来たユウだったが、気が付けば、太陽は既に地平線に沈み、辺りも茜色から闇色へと変わりつつあった。

「……ま、いつか。きっと、明日もいい天気。だから、また、明日」

窓に灯りが点りだした家々の影を、少し羨ましそうに眺めて、ユウは中庭を後にした。

10・(後書き)

ユウ、またまた王子様と出逢いました。

片や、紳士的な王子様。

片や、厄介者扱いされる王子様。

うゝん、王子様だらけ。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

そんな我慢強さTOPクラスのあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

再び新しい朝が来て、鳥たちがようやく起きだすような時間、アドルフは自国・カーエンタルへの帰路に着くべく、馬車へと歩を進めていた。

「ユーリウス」

「お呼びでしょうか、殿下」

アドルフは傍らに控えていた従者を呼び立て、口を開いた。

「昨日の、中庭にいた女。あれの名は何と？」

「はっ。確か、ジェラルド殿下は、ユウ、と呼ばれていたように存じます」

「ユウ、か……」

ニヤリと笑む主人を見て、その従者、ユーリウスは、得体の知れない寒気を感じた。

「殿下、何をお考えですか？ まさか……？」

「いや、何でもない。気にするな。行くぞ」

アドルフはぱさりとマントを翻し、その歩みを速めた。

「おはようございます」

フィオナの自室の前の詰所に入ったユウは、そこにいたリアに声をかけた。

「あ、おはよう、ユウ。改めて、今日から宜しくね？」

リアは作業の手をいったん休め、ユウの方を向き直った。

「いろいろご迷惑をお掛けすると思いますが、ご指導、宜しく願います」

そう言って深々と頭を下げるユウに、リアは慌ててユウの頭を上げさせた。

「迷惑をかけるのは、私の方だと思っただよね、どう考えても…。だから、気にせず頑張りましょ？」

リアがそう言って笑うと、ユウも一緒になって微笑んだ。

「さ。フィオナ様がお目覚めになる前に、しておくべきこと、済ませるわよ！」

リアが張り切ったように力こぶを作ってみせると、ユウも「了解しましたっ！」と右手を額に掲げて敬礼の姿勢をとり、これまでにない位、笑って見せた。

その頃のヴィンセントの執務室。

その部屋の主が、執務机に向かって書類をしたためている。

「……なあ、ヴィンス。訊いても良いか？」

ウォーレンは、久しぶりに顔を合わせたヴィンセントに、心細そうに声をかけた。

「どうした？」

「あの、さ。オレがジェイ殿下についてカーエンタールに出る前の日に連行されてきた、あの女の事なんだけどさ……」

気まずそうに俯くウォーレンを見て、ヴィンセントは、彼がまた何かやらかしたらしいことを感じ取った。

「レン、“あの女”ではない。ユウ、だ。で、どうした？」

そのまま、ペンを持つ手を休め、ウォーレンの言動に注意を集めた。

ウォーレンには、かつて、ユウを馬車から突き落とした事実がある。

（まさか、また、ユウの身に……？）
机に置いた手が微かに震えた。

「あの、さ。オレ、アイツが、フィオナ様の侍女になったなんて知らなくて。ジェイ殿下とカーエンタールへ出向く前の日も、あんなだったし。てつきり、あの……」

「レン、ハッキリ言えよ。彼女の腕、捻じり上げて拘束したこと」
言い淀むウォーレンをけしかけるように、男の声がした。

「アートっ?!」

「お前、前回も言っただろ？ 長く国を空けて帰って来たなら、留守中の状況を先に確認しろ！」

「……はい」

居るとは思わなかったステイアートから罵声を浴びせられ、ウォーレンは小さくなった。

「レン、今のアートの報告は事実か？」

ヴィンセントが、冷やかな目を向けてウォーレンに問う。

「はい。間違いありません」

消え入りそうな声でウォーレンが返事をする、彼はそれっきり

黙ってしまった。

「さて。ヴィンス、どうする？」

重苦しい沈黙に耐えかねたステイアートが口を開く。

ウォーレンは俯いて、ただ、立ち尽くしたまま動けない。

ヴィンセントは立ち上がり、ウォーレンの方へとゆっくり歩み寄った。

「……！」

俯いていた視界にヴィンセントのブーツのつま先を認め、ウォーレンは思わず首を竦めた。

「今日から二週間、ジェラルド殿下の護衛の任を解く！ ユウに習い、その所業、改めて来いっ！」

「は！ 仰せの通りに！ ……て、え？」

いつになく厳しいヴィンスの声に、その内容の如何に問わず、ウォーレンの口は反射的に諾^{うべ}ない、そして、改めてその命令を理解した瞬間、呆氣にとられた。

「ほらほら、早く行けよ。侍女たちはもう働き始めてるぞ？」

ステイアートに背中を押され、ウォーレンは、半ば追い出されるように執務室を出て行った。

「二週間、か。その間、どうすんだ、殿下方の護衛。お前一人じゃ無理だろう？」

扉を閉め、振り返りながらステイアートがヴィンセントに訊ねる。

「陛下から、許可を頂いたよ。流石に公には動けないが、あの子にも約束したから。俺が、お前を助ける」

「アート」

「一人で抱えるな。俺がいる」

「……すまない。感謝する」

俯くヴィンセントに近寄ると、ステイアートはポンと肩を叩いた。

国王の執務室では、国王とエディが、爽やかな朝には似つかわしくない、深刻な表情を突き合わせていた。

「……で、その話、真実なのか？」

「調べの付いた部分を纏めると、信じられない話ですが、どうも、そのようです」

「何故、今、再びこの地に……。どうにかできないのか？」

「この国にとって、容易く回避できるものではないのでしょうか。さもなくば、彼の“魔女”様が現れるなど、考えられない」

苦痛に耐えるような表情の国王と、眉間の皺を一層増やした魔術師団長が口を閉ざす。

すくと立ち上がり、窓際へと歩み寄った国王のその唇は、強く噛み締められ、薄っすらと血が滲んでいた。

自分に背を向ける国王に、エディは言葉を飛ばした。

「彼のお人は、幸か不幸か、いまだ覚醒されておりません。もちろん、ご自身もお気付きになられていないはず。ただ、あの日、私の放った術に、紛うことなく応えられた。今は何のお力を発せられなくとも、あの方は、間違いなく“偉大なる魔女”様です」

「しかし、あんなに弱き人に、我々が頼ってよいのか？」

「“魔女”様は、我らには計り知れないお力をお持ちです。今はまだ無理でも、ゆくゆくは我らをお護り下さる筈……」

そこまで言うと、達弁に語っていたエディでさえ、とうとう口を閉ざしてしまった。

11・（後書き）

長くなってしまいました。しかも、場面が四つ。

「ごちゃごちゃするし、読み難い……」とも思いますが、ちょっと訳有りな”朝”の場面だったので、敢えて、こんなことしてみました。

『我慢ならない！』と思われた方、どうぞ、ご連絡ください。

一定数を超えたら、どんなに先に進んでも分けれます。

（字数の都合で、四つにはできないかも？ ですが……）

それと、お知らせを一つ。

第一章と第二章で書き方を変えておりましたが（え？ 拙いのは変わってない？ 正解！ そこは永久に不変です！（↑情けない……））、この度、統一させることにしました。

つきましては、本日から、ボチボチと第一章の方を修正していきま

す。

基本的な流れは変わっていないと思うのですが、『なんか変よ？』

とお感じになられましたら、ご一報いただけると幸いです。

ご迷惑をおかけしますが、宜しくお願い申し上げます。

勿論、誤字、脱字、ご意見、愚痴、その他諸々もお待ちしております。

あとがきまで長くなってしまつてすみません。

ここまでお付き合いくださいましたあなた様に、心からのお詫びと感謝を。

諒でした。

「リア、ユウ。今日は図書館へいきたいのだけれど。ついてきて下さる？」

朝食を終えたフィオナは、食器を下げ、後片付けをしている侍女二人に声をかけた。

「図書館、ですか？」

ユウがフィオナに訊ねる。

「ええ、調べたいことがあって。確か、図書館にある持ち出せない本に、それが載っていたと思うのよ。だからどちらか一人で構わないのだけれど」

フィオナはにこりと微笑む。

「私が調べ物をしている間、好きなように時間を過ごしてもいいわ。図書館の本を読んでもいいし、館内に居てくれるなら他の仕事をしてもいいし。……ダメかしら？」

ユウはリアの様子をちらりとうかがった。

フィオナの後ろでワゴンに片付けものを載せている彼女は、あまり乗り気ではなさそうに、僅かに眉をひそめている。

「あの、私がお供させて頂いても？」

ユウは、思い切ってフィオナに申し出た。

「ありがとう。じゃあ、ユウの仕事がひと段落つくまで、わたくし、ほかの用事をしていきますわ。手が空いたら、声をかけてもらえるかしら？」

「かしこまりました。では、一旦ここで失礼いたします」

リアがワゴンの整理を終えたのを確認し、ユウはリアと共にフィオナの居室を辞した。

「ごめんね、お供、お願いしちゃって」

ワゴンを押しながら、リアがユウに詫げる。何故謝罪を受けなければならぬのか分からないユウは、不思議そうに首をかしげた。「私、図書館って、どうも苦手で。天井までいっぱい詰まった本棚、あれが怖い。落っこちてきそうで。あと、静かすぎるのもダメ。お化けとか、出そうじゃない？」

「お化けって。リアさんって意外と、怖がりだったりするの？」
首をすくめて話すリアが可愛く見えて、ユウはくすくす笑い出した。

「ん、もう！ そんなに笑わなくなっただっていいじゃない」

「ごめん、ごめん」

お互いの顔を見合わせて、またくすくす笑いながら炊事場へと足を進めていたその時、ワゴンが突然、ガシャン、と停まった。

「うわっ！」

「きゃっ！」

その衝撃に顔を上げると、目の前にはウォーレンが仁王立ちしていた。

どうやら先程のそれは、彼が直撃しそうになったワゴンを押さえつけたためだったらしく、ウォーレンの三白眼は、いつも以上に凄みを増して二人を睨んでいた。

「お前たち、どこ見て歩いてんだよ？」

「ウォーレンさん、どうしてこんなところに？」

蒼い顔で言葉も出さずオロオロするリアに対し、きよとん、とウォーレンを見るユウ。

二人の対照的なその態度に、ウォーレンは先程までの怒りをそれがれ、思わずふき出した。

「何？ どうしたんですか？ 何がおかしいんですか？」

「いや、いいコンビだな、お前たち」

いまだ笑いが止まらず、涙目のウォーレンにそう言われ、ユウとリアは顔を見合わせ、コトリ、と首をかしげた。

「とにかく。ぶつかっちゃって、ごめんなさい。おケガはありませんか？」

ユウが、ワゴンを受け止めたウォーレンの手に傷がないかを確認めようと手を伸ばす。

「うわぁ！」

それまで笑っていたはずのウォーレンは、ユウの行動に、慌てて手だけでなく身も引いた。

おまけに、その顔は、いつの間にかすっかり茹で上がったように赤くなっていた。

「さ……触るなっ！」

「ウォーレン様、どうなさいました？ お顔が……」

「う、うるさいっ！ オレに構うなっ！」

ずっとオロオロとしていたリアも、ウォーレンの尋常でない慌てように、すっかり落ち着きを取り戻す。

「おケガはないんですね？」

念押しするように訊ねるユウに、ぷい、とそっぽを向くウォーレン。

その様子を見て、今度はリアがくすくすと笑いだした。

「リアさん？」

「あ、ごめんなさい。失礼、でしたよね……」

口では詫びているリアだったが、先程からのくすくす笑いは全く止まる気配がない。

そんなリアに呆れながらも、ユウはウォーレンがなぜここにいるのかを考えていた。

（また、強引に抑えられちゃうのかな……）

微かに不安をにじませた目でウォーレンを見ると、ちょうど視線がぶつかった。

「すまなかった、な。勘違いしてたんだ、オレ。怖い思いさせて、ゴメン」

ぼそりと呟くウォーレンに、ユウは目を丸くした。

「どうして……？」

「ヴィンスとアートに叱られた。今日から二週間、お前から、いろんなこと教えてもらえ、って、団長命令。だから、うつとうしいだろうけど、勘弁な」

すまなそうに苦笑いするウォーレンに、ユウは驚きの表情を微笑みにかえた。

12・(後書き)

ユウとウォーレン仲直り、の巻。

ここにきて、本文内容も、執筆速度も足踏み状態です。
それなのに……

ある方にお誘いいただき、なんと、アルファポリス様に登録をして
参りました。

いろんな意味で、大丈夫か？ 私……？

いつものように、ご意見、ご感想、愚痴、世間話（↑あれ？ おハ
ツ？）、その他諸々、絶賛受付中♪でございます。

宜しければ、一言、声かけてやってください。
一生懷きます（↑なんか、ニホンゴ、おかしいような？）

ここまでお付き合いくださったあなた様に、心からの感謝をこめて
諒でした。

ワゴンに乗せた食後の食器を炊事場へ運び込み、後の片付けをリアに依頼した後、大急ぎで主の居室へと戻る。

「おい、なんでそんなに急ぐんだ？」

「フィオナ様が、図書、館へ、お調べ、物を、しに、出、られる、の。お待たせ、しては、いけない、で、しょう？」

本当なら走り出したい気持ちをグツと抑え、息を上げつつもせかせかと歩いていくユウに、ウォーレンが大きなストライドで、顔色一つ変えず、悠然と続いた。

「図書館か。たまには読書もいいな……お前も読むのか？」

「わたしは、まだ、字が、よく読め、ないから、無理……！」

ウォーレンが、すっかり息が上がりきって足を止めた、赤いユウの顔を、「大丈夫か？」と心配そうにのぞき込む。

「ふあ、近いっ！」

咄嗟に飛び出した右手が、目の前の左頬を捕らえた。

「っう……何すんだ、お前っ！」

ウォーレンが怒りの熱に任せ、その右手首を掴むと、ユウはギュッと目をつぶり、身を硬くしてうずくまって小さく肩を震わせる。

その姿を目にし、ウォーレンは、体中に思い切り氷をぶつけられたような感情を抱いた。

「……あ。オレ、また……」

掴んでいた手を離し、今度は、腫れ物にでも触れるかのように、震える肩に、そっと手を置いた。

ゆっくりと顔を上げたユウの眼には、余程恐ろしかったのか、う

るうるとこぼれんばかりに涙が浮かんでおり、それが更に、ウォーレンを窮地に陥れた。

「あの、オレ……その……」

「ごめんなさい。ビックリしたからって、いきなり叩いたりして、ホントにごめんなさい」

潤んだ眼のまま、勢い余って床に額をぶつけてもおかしくない位、ユウは深々と頭を下げた。

「あ、いや、オレだって、その……」

ウォーレンは、うつむき加減でしどろもどろに何か呟きながら、顔を赤くしている。

ユウは、そんなウォーレンを不思議そうに眺めていた。

「すまなかつたっ!」

だんまりを突然の謝罪が破る。

「今のはオレが悪かった。こっちこそ、驚いたからって、力で押さえつけようとして……。もう、しない。約束する。だから、許してくれ」

「ウォーレンさん……」

「オレ、お前の、そのきちんと謝れるところ、スゴイと思う。見習わなきゃな」

逸らすことを許さぬよう真っ直ぐに視線を合わせて、唐突に聞かされた言葉に、ユウは顔が熱くなるのを感じた。

「急ごう。フィオナ様がお待ちなんだろう?」

すっかり茹で上がったように赤くなった頬を押さえていたユウの手を取り、ウォーレンは歩き出した。

図書館は王城の敷地内に併設されており、建国時からの歴史書や、歴代の王に関する書物、古い言い伝えに関する絵本など、様々な書物を有している。

「じゃあ、わたくしはこちらで調べ物をしていますわ。昼食の時間までには部屋に戻るつもりだから、それまでユウは自由になさってね？」

そう言つて、古文書らしき古い書物を一冊手に取り、フィオナは館内の一画に席をとつた。

「かしこまりました。お時間が近くなりましたらお声かけさせていただきます」

丁寧な頭を下げ、ユウはその場を離れた。
ウォーレンも、ユウに続いてフィオナの傍を辞する。

「どうしてついて来られるんですか？」

「言つたじゃないか。二週間、お前から色々と学ばないと、オレ、また、あの二人から大目玉をくらうんだぜ？」

暗に「ついてくるな」と言つたつもりのユウに、ウォーレンは、全く悪びれた様子もなく飄々と返事した。

「お前、まだ字がよく読めない、とか言つてたな？」

そう言いながら、ウォーレンは近くの書棚にあつた一冊の絵本を手にした。

「これさ、オレも子供の頃、よく読んだ絵本なんだ。オレ、この絵本読んで、感動してさ、大きくなったら立派な魔術師になる！　つて、みんなに宣言したんだよなあ」

照れくさそうに笑いながら、手にした本をユウに持たせた。

「これ？」

「ずっと昔にこの国を創つた、一人の魔術師の伝記だよ。五・六歳

の子供向けに書かれてるから。読めるだろ？」

ユウは、そんなウォーレンの声に耳を傾けながら、ペラペラとページをめくってみた。

「少し難しそうなところもあるけれど、何とか読めそうです。ありがとうございます」

「じゃ、オレは、その辺を見てくるよ。また後でな」

ひらひらと手を振りながら離れていくウォーレンに、ユウは深々と頭を下げて見送った。

『偉大なる魔女』とタイトルされた絵本を手に、窓際のベンチに座る。

本を開くと、何となくカビ臭いようなにおいが鼻をかすめた。

* * * * *

今からずっと昔の事です。この大陸で、大きな戦争がありました。強くて大きな力を求めて、大陸にあつたたくさんの国が、お互いに見張りを置いて、殺し合い、奪い合いを繰り返していました。

そんな期間が長くなるにつれて、どの国の人々も、どの国の兵士たちも、終わりの見えない争いごとに、次第に精神を狂くるわせていきました。

そこに、一人の魔術師がやってきました。

濡れ羽色の髪を持つ、黒い瞳のその人は、人々が想像もつかないくらい大きな魔力と、その物事を深く見通すすぐれた判断力で、何年にもわたったこの戦争を終わらせました。

そうして、この大陸を三つの国に分けて新たな国を創り上げ、人々が平和に暮らせるよう力を尽くしました。

戦争が終わってからしばらくして、人々が穏やかな生活を取り戻したことを見届けた魔術師は、いつの間にか、その姿を人々の前に現さなくなっていました。

その後、その人の姿を誰一人として見たものはおらず、人々は、その魔術師の事を『偉大なる魔女』と崇め^{あが}、忘れることのないよう、その功績を語り伝えることにしました。

その魔術師の名は――。

* * * * *

「……エヴァ^アメル・ウオードン」
ぼそり、と小さな声で、本に書かれた魔術師の名を呼ぶ。

ユウは、名を口にした途端、耳の奥からキィーンと金属音が響き、世界が歪むのを感じた。

――待チカネタゾ、我ノ力ヲ継ギシ娘。

消えそうになる意識の端で、いつかの声が聴こえたような気配を覚えた。

13・(後書き)

『魔女』様のお話がようやく出せました。

”ようやく”なんて言ってる割には、魔女様の昔話部分、短いですけど(泣)

……頑張ります。

お立ち寄り頂きましてありがとうございます。

ここまでお付き合いくださったあなた様に、心からの感謝を。
諒でした。

「……ウ、おい、しつかりしろ！ ユウ！」

ぐったりと力の入っていない身体を盛大に揺す振られ、ユウは、
ゆっくりと目を開けた。

「よかつ、た。気が付いた」

ユウのうつろな視線の先には、安堵に満ちたウォーレンの顔。

「……私？」

「オレが戻ってきたら、気を失ってたんだよ。大丈夫か？ 無理してんじゃないのか？」

ウォーレンが、今度は懸念の表情で、ユウを見た。

「ちゃんとお役に付いたのが昨日なので、まだ、少し緊張してるのかもしれないです。心配させてしまって、ごめんなさい」

そう言いながら、ユウは、立ち上がって足元に落ちている絵本を拾い上げ、汚れや破れがないのを確認してから書棚に戻す。

その姿を、ウォーレンは腕組みをして、じっと見ていた。

「……どう、されました？」

痛いほどの視線を感じて、ユウが、少し怯えながらウォーレンに訊ねる。

「お前、今まで魔力を感じたことは？」

「ないですよ、そんなの。私が住んでいた世界には、魔力なんてないんですから」

至極真剣な表情のウォーレンに、ユウは笑って答えた。

（おかしい。さっきまでは、何も感じなかったのに…… オレが離

れている間に、一体何があったんだ？)

黙り込んでしまったウォーレンを、今度はユウが心配そうに見つめていた。

その後は何事もなく、ただ淡々と過ぎて行った。

ユウは、昼食前にフィオナに声をかけて図書館を離れ、侍女としての勤めに戻る。

そうして昨日までと変わらない時間が過ぎてゆく。

ただ一つ違ったのは、今までになかった“何か”が、そこに、確かに、存在していること。

それが何なのか、そこにいる者、誰一人として、知り得ることはできなかった。

その日の終わりを告げる漆黒の空には、ぼんやりと霞がかった三日月が浮かんでいた。

14・(後書き)

……短くて、ごめんなさい……

既に時間は日付を越えようかとしている頃。

ヴィンセントは自身の執務室で、ステイアートと共にウォーレンから報告を受けていた。

「……で？ 彼女の“気配”がおかしい、とは？」

ステイアートがウォーレンに問う。

「今日、アイツの“気配”が変わったんだ。なあ、ヴィンス。アイツ、本当に魔力を持っていないのか？」

「そのようだ。私が屋敷で匿っている頃も、魔力の“気配”はなかったが？」

ヴィンセントの返事に、ウォーレンは頭を抱える。

「どうした、レン？」

困惑の表情を浮かべる目前の部下を、ヴィンセントは訝しげに眺めた。

「……思い違いでなければ、アイツ、魔力を持ってる……それも、ケタ外れの……」

「何？」

「どういうことだ？」

吐き捨てるように呟いたウォーレンに、二人は驚く。

「まんまだよ。アイツの“気配”に、異様に強い魔力が混じり始めている。アイツ、一体何なんだ？」

ウォーレンの至極真剣な視線に、ヴィンセントは得体の知れない感情を抱く。

「なあ、ヴィンス。俺、良くわからないんだが、そういうもんなのか？」

ステイアートは、執務机に肘をつき、少し俯き加減に額を置くヴィンセントを見た。

「ああ、そうだ。その人物がまとう“気配”に魔力は織り込まれる。自身の魔力が強いと、相手の“気配”に反発して、それを感じ取る」

ヴィンセントはひどく重そうに頭を持ち上げ、斜め左前方にいるステイアートに言う。

「ただ、魔力が強ければ強いほど、その制御については十二分に鍛錬する。無意識下でも確実に抑え込めるように」

その言葉に、ステイアートは眉間に皺を刻み、「何故？」と言わんばかりに首をかしげた。

「自分から魔力の強さを誇示したところで、正直、何の得にもならないよ。戦場になれば、尚更。実際はどうか知れないけれど、狙われて、寝首をかかれるのがオチじゃないかな」

苦笑いを浮かべて、ヴィンセントはステイアートに告げた。

「……で、レン。詳細の報告を」

ヴィンセントの顔が、一瞬で策士の顔に変わる。

それを見て、ウォーレンは、自身が感じたユウの“気配”について口を開いた。

朝、廊下で顔を合わせた時点では、一般人にも感じられる程度の魔力すら感じられなかったこと。

午前中はフィオナと共に、三人で図書館へ向かったこと。

フィオナが自分の作業をしている間、ユウは、少し離れた場所で時間を過ごそうとしていたこと。

ウォーレンが、暇つぶしになるように、と、子供向けの絵本を差

し出したこと。

そして、ユウがその絵本を受け取ったこと。

「……少なくとも、この時点では、“気配”は廊下で顔を合わせた時と同じように、魔力の微塵も感じられなかった。だけど……」
「『ただど?』」

「何だか嫌な感じがしたから、図書館の外を見廻りに行って。戻ったら、アイツが氣い失ってた。この時点ではもうおかしかった。それまでの“気配”とは別モンだった」

ウォーレンが有り得ないと言わんがばかりに首を振った。

「ユウのもとを離れたのは、時間にしてどれくらいだったんだ?」

「ハッキリとは言えないが、多分、二、三十ミ二程度だと思う」

「その間にあれの身に何かあった、ってことだな?」

扉の方から、三人とは別の声が執務室に響く。

「ルーカス殿下、このような時間にどうされました?」

ヴィンセントが少し不機嫌に声をかけた。

「ん? 何だか楽しそうだったんでな?」

口角をクツと引き上げて、ルーカスがヴィンセントに返す。

ステイアートとウォーレンは、ヴィンセントとルーカスの間にある、今までとは少し様相の異なる空気に身を固くし、状況を見守るしかなかった。

15・（後書き）

お、とうとう幼馴染四人が一堂に会しました！

……が、なんだか、様子が……（汗）

アート兄は、魔力が弱いのですが、剣に長けています。

対して、レンは、剣術は苦手。だけど、魔力が強い。

以上、本文に盛り込み損ねた補足でした。

後程、世界設定に、コソつと項目、追加します。ホントに些細な内容です。

仄暗い灯りの中で、ピンと張りつめた沈黙を破ったのはルーカスだった。

「どんな“気配”だった？」

ウォーレンに問う。

「ほんのしばらくの間でしたが、今までに感じたことのない魔力でした。威厳のある、全てのものを従えてしまいそうな……」

「今は、どうだ？ あれの部屋から、何か感じ取れるか？」

「いえ、今は、何も……」

「ヴィンス、お前はどうか？」

「……私にも何も。ですが、殿下、あなたがなぜそれを気になさいますか？」

ヴィンセントが、自身に歩み寄るルーカスを真っ直ぐ見据える。

その視線に、ルーカスは逸らすことなく応えた。

「気になる……か？」

ルーカスを見るヴィンセントの眼に、一瞬、鈍い光が浮かんだ。

その光景に、ステイアートは無意識のうちに腰に携えた剣に手をやり、ヴィンセントに向けて足を一歩踏み出す。

「陛下の……父上の部屋から、嫌な声を聴いてしまったものでな……」

苦虫を噛んだような顔のルーカスに、ヴィンセント達は一様に怪訝な顔をあわせる。

「……どうやら、そう遠くない未来に、この国は大戦に巻き込まれるらしい……」

三人は息を飲み、ルーカスに視線を集めた。

「……どうして、戦争なんて……」

ウォーレンが震える声で小さく零す。

「すまん、エディはそこまで父上に話してはいなかった。恐らくは“先読み”を行ったんだろう。ただ、『大戦が起きる』と。そして、これを回避するのは、不可能に近いらしい」

ルーカスが横を向いて、三人の視線から自分を逸らせる。

「それに、『魔女” 様が現れた』と」

「“魔女”、様？」

ステイアートが訊きかえす。

「まさか、“偉大なる魔女”、様？」

「……そのようだ」

「何処に……何処にお見えになられたのですかっ?!」

未だ目を合わせないルーカスに詰め寄ったウォーレンを、すんでの所でステイアートが抑え、左頬を軽く叩いた。^{はた}

「おい、落ち着け、レン！」

ジンとする刺激に、ウォーレンは自分を取り戻す。

「……申し訳ございません、殿下」

「構わん、気にするな。お前は昔から“魔女” 様を敬愛しているからな？」

ニヤリと笑みを浮かべたルーカスに、ウォーレンはほんのり頬を赤くし、相手の胸元めがけて拳をぶつける。

「なんだよ？ 照れ隠しか？」

ますます分の悪くなったウォーレンは、ルーカスの笑みが視界に入らないよう、口をへの字に曲げて、プイ、と横を向いた。

そんなウォーレンの頭を、ステイアートはクシャクシャと撫でつける。

「何すんだ！ アートっ」

すっかり荒らされてしまった髪を力任せに整えながら、ウォーレンがステイアートを斬れそうな眼差しで睨んだ。

睨まれた本人とルーカスは、その姿に、もう辛抱ならんと言わんばかりに盛大に嘔き出した。

先程までは傍観者に徹していたヴィンセントも、口元を押さえて、どうにか笑いを堪えようと顔を赤くしている。

不貞腐れたウォーレンは、自室に下がろうと扉のノブに手をかけ、図書館でユウに手渡した絵本の事をふと思い出した。

「濡羽色の髪…… 漆黒の瞳……」

その眩きが、ヴィンセントの注意を引く。

「レン？ どうした」

「あ、いえ。別に関係ないとは思うんですけど、今日、アイツに図書館で渡した絵本、“魔女”様の伝記でした。オレがちっこい頃、何度も何度も読み返したやつ」

「ああ、あの『大きくなったら、立派な魔術師に、オレ、なる！』って、読んだ後に必ず泣きながら言ってた？」

薄っすら浮かんだ涙を拭いながら、ステイアートが加わる。

「うん、そう。……って言うか、どんだけ笑ってたんだよ、アート」
それをきっかけに、じゃれあうような取っ組み合いの喧嘩を始めた二人を横目に、ルーカスとヴィンセントが視線をぶつける。

「“偉大なる魔女”……」

「“濡羽色の髪” と、“漆黒の瞳”……」

溜息のように漏れたささやきが消えると同時に、二人の顔から血の気が引いた。

「……ま、さか」

「いや、そんなはずは、ない……。あつてくれるな！」

ルーカスは降ってわいた恐ろしい予感を打ち消すかのように、傍らの壁を思い切り叩き付けた。

突然生まれた大きな音が、この部屋に、再び張りつめた静けさを戻した。

16・(後書き)

幼馴染だよ、全員集！合！ その忒。

末っ子・レンを弄るのが、なんだか楽しくて仕方がない。 ↑ うおい

っ！Σ＼(ー、；)

…… おかげで、先へも進まない…… orz

そのうち、レンから鉄拳、来るよね？

ありがとうございました。 諒でした。

執務室の壁に開いた穴に右の拳を突っ込み、俯いたままのルーカスの肩が僅かに震えていた。

「……殿下、今日はもう夜も更けました。この先は、明日にいたしましょう」

ヴィンセントがルーカスの手を壁の穴から引き抜き、ぼつぼつと突き刺さった木片を、一つ一つ丁寧に抜いていく。

借りてきた猫のように大人しく鳴りを潜めているルーカスに、ステイアートとウォーレンは、暫くその様子を呆然と眺めていたが、どちらからともなく動いて手当に必要な包帯や湯などを持ち寄った。「ああ、すまない。アート、レン。ここは、もういい。明日に備えて休んでくれ」

その心遣いにヴィンセントが礼を言うと、二人は了承の会釈をし、執務室を後にした。

「……ヴィンス」

きれいな布を湯に沈め、細かな傷口を拭っていたヴィンセントに、ルーカスは声をかけた。

「どうされました？ 殿下」

「……お前、どうしてそんなに冷静でいられるんだ？」

「なんの事でしょう？」

「しらばつくれるな！ あれが“魔女”だと、つつ！」

手当を受けている右手が、強い力に締め付けられ、あまりの強さに顔を歪める。

「……あれ、ではありません。ユウ、ですよ？ ルー」

ヴィンセントはいつもと変わらぬ表情で、しかし、手当には少し強すぎる力で包帯を巻いていく。

「ヴィンス、わかった、すまん。少し緩めてくれないか？」

「わかれば結構。……で、ユウの事ですネ？」

ヴィンセントはふつと笑って、ルーカスの右手を引き締めていた包帯を適度に緩め、始末した。

締め付けから解放された右手に、ほう、と一息を吐く。

「ユウは、本当にあの“魔女”なんだろうか？ だとしたら、戦争なんかが始まれば……」

「落ち着いてください。まだ、そうと決まったわけではありません。いずれにしろ、今夜はもう休まなくては。明日に響きます」

「……わかった。今日は、ここまで、だ」

ヴィンセントに遮られ、ルーカスはすぐと立ち上がると、扉へ進み、ノブに手をかけた。

「……悪かった、な」

「いえ、殿下。良い夢を」

そして、扉が静かに閉められた。

いつも通りに、いつもと変わらぬ朝がやってきた。

ベッドから起きだし、カーテンを開け、窓を解放し、夜の空気と朝の空気を入れ替える。

一つ大きな伸びをして、鏡に映る自身の姿に、暗示をかけるように呟く。

「……エヴァーメル・ウォードン……」

ドクン、という空間が歪むような衝撃とともに、ユウは取り囲む空気が一変するのを感じた。

再び鏡に目を落とすと、見ず知らずの女が映り込んでいた。

取り立てて目立ちそうにないその容姿は、ごく普通の街娘の様でもあった。

しかし、明らかに街娘ではない証。

この大陸に住まう人間には、見られない色彩。

濡羽色の艶やかな長い髪。漆黒の闇夜を思い起こさせる瞳。

鏡に映る女は、昨日の絵本に書かれていた“偉大なる魔女”の特徴を全て持ち併せていた。

「あなた、は……」

ユウが口を開いた直後、扉をたたき割りそうな勢いでノックされた。

「ユウ！ ユウっ！ 無事か？ 無事なら、返事してくれ！」

「は、はいっ！ ただいまっ！」

その勢いに、自分がどんな格好かも忘れ扉を開けると、蒼白の顔のヴィンセントが立っていた。

「良かった、無事で……」

そのまま、グイと引き寄せられ、ユウはヴィンセントの腕の中に囲われる。

「ヴィン……」

抗議しようと顔を上げたところで、ヴィンセントの唇で自身の唇を塞がれる。

突然の出来事に、ユウは、抵抗することを忘れてしまった。

17・(後書き)

ううん、思うように前に進まない。
いろいろと、ゴメンナサイ……。

時間にして、ほんの一瞬の出来事。

それでも、ユウにはとてつもなく長く思えた。

やがて、ゆつくりとヴィンセントの顔が離れていく。

それを、ただ呆然と、見送った。

どちらも声を発しないまま、また、時間が流れる。

酷く難しい顔をしたヴィンセントと、困惑した面持ちのユウの間に、不可思議な空気が存在した。

「すまない」

会話の扉をこじ開けたのは、ヴィンセントの方だった。

「……何が、ですか？」

そこで会話が途切れる。再び苦い空気が二人を包んだ。

「ヴィンス！」

その場の重さを一掃するかのように、ウォーレンがヴィンスに駆け寄る。

「今の……」

「ああ、恐らく」

目前で、言葉少なく会話を成り立たせる二人の騎士に、ユウは首を傾げたまま視線を向けた。

「お前……」

その視線に気づいたウォーレンは、ユウの姿を見た直後、顔を赤くし、絶句した。

ユウが自身を見下ろし、「あ」と零すと、それをきっかけに、滞っていた時間が流れを取り戻す。

一瞬にして頭の前から首のあたりまでを赤くしたユウが、大慌てで自室に引っ込み、外れてしまいそうなくらいの勢いで扉を閉めた。

「何なんだ、あれは」

クツクツと堪え切れない笑い声をもらしながら近づく背後からの靴音に、ヴィンセントは振り返りもせず告げた。

「ようやく出てきましたか、殿下。……どうなさるおつもりですか」

「どうするつもりか、って？　今までと変わらない。あれには、自覚が無かるう？」

「しかし……」

「もう少し、時間が必要だ。ユウにも、私達にも」

ヴィンセントの肩に、ルーカスの右手が置かれる。

「焦るな。まだ、大丈夫だ。父上とエディの方は私がやる。お前たちは、あれの周囲に気を付けてやれ。正直なところ、何が起きるかわからない」

ゆっくりと振り返るヴィンセントの視線が、ルーカスの真剣な視線にぶつかり、互いに頷きあう。

そのまま言葉を発することもなく、ルーカスは元来た方へ歩いて行った。

「ヴィンス……」

「いろいろと、厄介なことになりそうです」

じわりと声に不安を浮かべたウォーレンに、ヴィンセントは眉尻を下げて、首をすくめて見せた。

「では、私は自室に戻ります。しっかり修行して、立派になって戻ってきなさいね」

「な?!」

眉根を引き寄せ、情けない顔をしていたウォーレンが、瞬時にぼ

かん、と呆氣にとられる。

「ハハ…… まあ、あながち冗談でもないんですけど。……ユウの事、お願いします。何かあれば、すぐに連絡を」

「ああ、解った」

「ありがとう。頼りにしているよ、レン」

とん、とウォーレンの肩を叩き、ヴィンセントもその場を引き上げた。

窓のない小さな石造りの部屋に、ククク、と噛み殺すような笑い声が響く。

「やっと見つけましたよ……わたしの、”魔女”」

一筋のロウソクの火の中にぼんやりと浮かび上がったその顔には、歪んだ笑みが貼り付いていた。

18・(後書き)

お待ちいただいたがいらっしやいましたら、ごめんなさい、です。
なかなか書き進められず、この有様。

もう、ホントに、ホントに、ごめんなさあ〜いっ!。。。)
A(。。。↑お前が泣いてどーするっ?!

19・(前書き)

遅くなりました。

申し訳ありません……

鏡に映り込んだ自分ではない姿を目にしてから一週間。

あの日以来、毎朝のように鏡の前でその名を呼んでみても、映る姿が変わることはなかった。

今日も、いつもと同じ朝がやってくる。

ベッドから起き上がり、お仕着せに着替えて身支度を済ませ、詰所へ向かうために扉を開ける。

「よお、おはよう」

「お、はよう、ございます」

扉のすぐ横には、この一週間、ずっとウォーレンが待ち構えていた。

「なんで、毎朝居るんですか」

「言っただじゃないか。お前を見習って、偉くなって帰らないと、ヴィンスにしめられる、って」

よいしょ、と小さく声に出してもたれていた壁から体を起こし、じ、っとユウを見る。

「なんですかつ」

「ん？ いや、なんでもない。さ、フィオナ様がお待ちじゃないのか？」

ユウの、ぶすつ、と脹れた表情が瞬時に崩れて慌てふためき、彼女は『走る』の少し手前の速度で詰所へと飛んで行った。

そして、一人残されたウォーレンは、声にするのも惜しむかのように、かの人の名を呼んだ。

「……エヴァ。本当に、貴女なのですか……？」

「陛下…… 答えください。あなたは何をお考えなのですか？」

真つ直ぐな視線の先に自身の父の姿を置き、しかし、その口調は父に向けられるようなものではなく、冷淡で硬いものであった。

「父上！」

「ルーカス殿下、落ち着かれています。陛下には、陛下のお考えがあつて……」

「黙れ、エディ！ 私は、陛下にお伺いしているのであつて、お前に訊いているのではな」

「ルーカス！」

国王と共に早朝から執務室にいたエディに食つて掛かったルーカスを、国王はその一声で一蹴した。

「ち……ち上」

「落ち着け、ルーカス。何故、そのように声を荒げる？ お前らしくないではないか」

自らの前では滅多な事では変えることがなくなった息子の表情が、ほんの瞬間、僅かに苦しげに歪んだのを、国王は、見落とさなかった。

「私は…… 私はただ、この国の行く先を案じているのです。ここしばらく、何だか不穏な気配がまわりついて落ち着かない。今も、

こうしてエディを傍らに置かれている。一体何がこの国に起こっているのです、陛下？」

先程とは打って変わって落ち着いた――しかし、僅かに焦慮を含んだルーカスの声が早朝の空気を震わせた。

それに対し、どこか不穏な気配をまとった声が答える。

「では、こちらから訊こう。お前は、何が知りたい？ ルーカス」

「……陛下？」

「知りたいのであろう？ 今、何が起きようとしているのか」

「はい」

「ならば、教えてやってもよいぞ」

片肘をつき、その上に頭を載せて、どこか、ニヤリ、とでも言うのがふさわしいような笑みを浮かべて、目の前にたたずむ青年を見遣る。

「陛下」

「良いではないか。次期国王は、愛国心にあふれておる。そんな方が、知りたいと言うのだ。教えて差し上げるべきだろう？」

傍らのエディの制止に対し、豪快に笑い声をあげた国王であったが、その眼は笑ってはいなかった。

「さあ、ルーカス。何が知りたい？」

その奥に何かを隠し持つ視線に射られ、ルーカスは動けなかった。

キナ臭い噂の事、魔女再来の話。そして、国王の命でユウを匿い続ける理由……。

声にならない焦りが、背筋を、つ、と滑り降りた。

「先程までの勢いはどうした？ 知りたいのであろう？ 私が何をしようとしているのか」

一度も逸らされない国王の眼差しに、ルーカスは真剣の切っ先を喉元に充てられたような感覚を覚えていた。

「……そう遠くない将来、この国によからぬことが起きる、と、何処からか聞こえてきました。恐らく、争い事の類かと思われますが……」

ルーカスが、重い口を開く。

「いつも早いな、お前の情報網は」

フツとひとつ鼻で笑い、国王は続けた。

「そうだ、お前の言うとおりだ。さほど遠くない未来、この大陸で大きな争い事が起きそうだ」

「何故……」

「はつきりした理由は、まだ解っていない」

「避けられないのですか？」

「多少の時間稼ぎはできるやもしれん。しかし、完全な回避はできないらしい……」

ここまで話し終えた国王の表情が曇るのを、ルーカスは、ただ、見ていた。

「“偉大なる魔女”が、我が国に遣わされたようです」

それまで傍らで沈黙を守っていたエディが声を発した。

「偉大なる、魔女？」

「はい。先の『アーマーズウエーの大戦』を治めたと言われる魔女様です。彼のお方が遣わされるほどの争い事……。まず、避けることはできないでしょう」

「どういうことだ？ その、『魔女様』とやらは、争いごとを治めるんだろ？ その魔女がこの国に遣わされたというのなら、避け

られるのではないのか？」

「いえ、殿下。言い伝えでは、魔女様が力を発し大戦を治めた、とされていますが……」

ルーカスの問いに答えていたエディの声が、そこで途切れる。

「…… 真実は、そうではなかったのです」

「ユーリウス」

「はっ、こちらに」

白銀の髪がサラリ、と揺れ、振り返った従者の主は、秀麗な顔立ちに意味深な笑みを浮かべていた。

「例の件、どうなっている？」

「はい、万事、滞りなく……とご報告申し上げたいのですが」
「どうした」

「はい、あの侍女、これまでの経歴が全く出て参りません」

「どういうことだ？」

「どこで生まれ、育ち、どのような縁故でベイルシャルの城にいるのかすら、全く何も知れないのです」

ユーリウスはそこまで告げると、片膝をつき、首を垂れた。

「申し訳ございません、殿下。今しばらくの……」

「良い、気にするな」

謝罪を口にする己が従者の言葉を、アドルフは笑みを深めながら遮った。

「濡羽色の髪に、漆黒の瞳……。フッフ……。やはり、そうか」

抑え込むような笑い声をもらしながら、アドルフはユーリウスの肩に手をやる。

「必ず、あれを手に入れて参れ。その為の手段は厭いとわぬ」
頭を上げ、そこに見えた仕えるべき主の黒く陶醉した表情に、ユ
ーリウスは震えおののいた。

狭く薄暗い螺旋階段に、カツカツと乾いた足音が響く。
アドルフは、足元を照らすためのロウソクを一本手にし、階段を
下りきつた先にある部屋を訪ねた。

「レオナルト、いるか？」

ノックもせずにその部屋の扉を開け、部屋の主に声をかける。
窓もない石造りのその部屋の主は、目を手元の書物からゆっくり
と上げた。

「おや、アドルフ殿下。わざわざこちらまで？ 何か御用でしたら、
お呼び立て下さればよろしかったのに……」

手元の灯りのために置かれたロウソクの火が、男の顔をぼんやり
と闇に浮かび上がらせる。

二人の男は互いに顔を見合わせると、どちらからともなく歪んだ
笑みを漏らした。

窓のない小さな部屋には、テーブルと椅子が二脚、大きくはない棚と、簡素なベッドが一台置かれている。

椅子に腰かけ、読んでいた書物から視線を上げた男は、わざわざその部屋を訪れた王太子にもう一つの椅子をすすめた。

「お前の“落とし物”、見つかったようだな？ レオナルト」

「ええ、殿下もお気付きでしたか。自らその在り処を知らせてくれましたよ」

そう言いながら、レオナルトと呼ばれた男はクククと薄気味悪い笑みを浮かべ、手にしていた書物をテーブルに置いた。

「ものは相談なんだがな、お前の“落とし物”、手に入れた暁には、私に譲ってはくれないか？」

テーブルに両肘をつき、にたり、と穏やかでない笑みを浮かべて、アドルフがレオナルトに持ちかける。

それを聞いたレオナルトの薄気味悪い笑みは、より一層深くなった。

「おや、殿下。人のモノを欲しがる悪い癖がまた出て参りましたな？」

「あれが気に入ってな。どうしても、この手に入りたい。どんな手段を使っても、な」

「なるほど、お目に留まりましたか。なかなかの上物でしたでしょう？ この国の王宮魔術師の称号を戴きながら、私としたことが、まったくお恥ずかしい失態を犯したものです。何事もなければ、すぐにでも殿下に献上できたものを」

レオナルトは、右手で両の眼を覆い、大袈裟に頭を振ってみせた。
「……ですが殿下。どんな手を使っても、私が、必ずや殿下のお手元にお届けいたしますよう」

「期待して待つておるぞ、レオナルト。お前はこの大陸一の魔術師だ。お前にできないことなどないだろうて」

そうして、石造りの部屋中に、男達の妖しげな笑い声が響いた。

「真実では、ない……だと？」

ルーカスは驚きを隠さずに、エディを見遣った。

「はい。言い伝えは、真実ではありません」

そう語るエディの表情は、ひどく硬く、冗談だ、と笑い飛ばせるようなものではなかった。

「では、いにしえの大戦の本当の結末は……？」

「魔女が関与して、大戦が終結したことは事実です。ただ、その過程が違っただけで……」

そこまで言うと、エディは国王の方に視線を送り、国王はそれに黙って頷きを返した。

「お耳に、入れられますか？」

この国の魔術師団長の問いかけに、蒼い顔のまま、ルーカスは頷いた。

「では、少々長くなりますが……」

そう言って、エディはゆっくりと話し始めた。

* * * * *

この大陸の至る所に些細な原因で起きた小さな争いは、その後十年、二十年と年月をかけ、次第に大きくなり、やがて大陸全土を戦場とした大きな戦争となった。

人々は、その期間の長さや互いに憎みあい、^{おとし}貶めあうことに辟易とし、疲れていった。

しかし、そんな状況になってもどちらからも手を引くことはせず、ただ、闇雲に無駄な時間だけが過ぎていった。

そんな中、真っ黒な髪と漆黒の瞳を持つ一人の人間が、何処からともなく現れた。

その人は、ただ一人で戦場へと舞い降りて、敵味方関係なく兵士たちを殺めていった。^{あや}

人を殺めるその表情はただウツトリと蕩^{とろ}けており、またその姿は赤い海を自在に飛び回る黒い影のようだったと言う。

この漆黒の人物の登場で、ようやく人々は目を覚まし、その圧倒的な力を抑えにかかることとなった。

しかし、個々に挑んだところで、その力の差は歴然としている。人々は、これまでの行いを悔い、悩んだ。

そうして互いに力を合わせようと話し合いをもったその場に、一人の人間が現れた。

白金の髪に暗緑色の瞳を持つその人は、自らの身をもって、漆黒の人物を抑えてみせる、と一人、戦場へと発つ。

残された人々は、その勇敢なる人が、漆黒の人を抑えると信じる者と、敗れたのちの報復を恐れる者の二手に分かれた。

長きにわたる戦いにより今や廃墟と化したかつての王都で、二人は視線を交わらせる。

互いに一言、三言、言葉を交わし、一蹴り空に舞ったかと思うと、そこからは世にも絶する修羅となった。

来る日も来る日も二人の持つ剣の悲鳴や、地の唸り声が治まることがなかった。

そうやって、幾日にも及んだ激戦だったが、ある日、突然、幕を下ろした。

ふとした拍子に漆黒の人がみせた隙を、勇敢なる人が制したのだ。そうして、漆黒の人は消え失せ、後を追うかのように、勇敢なる人も姿を消した。

残された人々は、その壮絶さに、ただ、ただ、涙し、この惨事を二度と再び繰り返すことのないように語り継いでいくことを、互いに固く誓いあい、親から子へ、子から孫へと伝え続けた。

* * * * *

「長い年月が経つうち、言い伝えられる内容が少しずつ変わったのでしょう。現在ののような“偉大なる魔女”像が出来上がったようです」

「……そのような悪人ならば、何故、人々は、その魔女を崇めるんだ？ 憎み続けるものではないのか？」

「誰彼構わず手にかけていたなら、そうだったでしょう。しかし、漆黒の人はそうではなかったのです。確かに、敵味方に関わらず、兵士たちは殺めました」

「エディ、何が言いたい？」

「漆黒の人が手にかけてしたのは、兵士たちだけなのです、殿下。武器も持たずにただ村にこもって身を守ることしかできなかった者たち

を襲った兵士たちだけなのですよ」

「では、勇敢なる人は、弱者を護った漆黒の人を制した、と？」

ルーカスの問いかけに、エディは、こくり、と頷く。

「……ですから、我々は、彼のお方にこの地に留まって頂く必要があるのです。国を、国民を護るために」

「……そ、んな……」

「お目覚めになられた以上、その力は、諸刃の剣。どの国も、手に入れるべく動くでしょう」

「……無理、だ。そんな、無理だ！ そんな、戦場なんて、あの子には無理だ！ ユウには……！」

我を忘れて口にした名に気付いたルーカスは、己の愚かさに息を呑み、俯いた。

「やはり、気付いておったか」

国王の静かな声が流れた。

「……はい」

「それでも、あの娘を、自分の傍らに置きたい、と？」

「……はい」

「運命に抗うことになっても？」

「……私は、あの子が……ユウがいてくれるなら、運命をも変えたいと思います」

強い意志を表に出して顔を上げたルーカスが、真っ直ぐに国王を見る。

その視線を受け、国王は、沈黙を続けた。

どのくらい時間が経ったのか。

重い沈黙の末に、国王は、ふつ、と父親の顔をのぞかせた。

「その言葉に、嘘、偽りはないな？ ルー」

「ありません。陛……いえ、父上」

「……良からう」

真つ直ぐ逸らすことのない力強い視線に、国王は厳しかった表情を少し崩した。

「ありがとうございます」

片膝をつき、深々と頭を下げるルーカスに、国王は苦笑いを浮かべた。

「まだ何も言っていないだろう？ 気が早すぎるぞ」

「そうですね、殿下。彼のお方には、もうしばらく先に、私の下で魔術を学んで頂きます」

「何故？」

「彼のお方が、漆黒の人、だからです。殿下」

キツ、と睨み付けたルーカスを、エディは、ピシヤリ、と撥ねつける。

「お目覚めになられた以上、ご自身でその力を操って頂かなくては。殿下もお判りでしょう？」

「ユウは、まだ何も知らない。なのに、魔術を？ しかも、お前の下でか？」

「私以外に、他に誰がいますか？」

そう反論されて、ルーカスは、うつ、と返事に詰まった。

「時は一刻を争います。あの力の放出から、既に一週間。どの国も、虎視眈々と構えているやもしれません。私のもとで学んで頂くのは、もちろんご自身でお力を操って頂く為でもあります。しかし、一番は、その御身をお護りするため。ご理解ください、殿下」

エディの厳しい表情に、ルーカスはそれ以上、何も返さなかった。

グインセントは一人、自分の執務室の窓辺に立ち、そこから見える切り取られた空を見つめていた。

「……ユウ」

無意識のまま溜息混じりに零した名前をに気付いて、慌てて周囲を見渡し、誰もいないことに、ホッと息をつく。

—— ユウが、偉大なる魔女？

ふと思い出し、ふるふると弱々しく頭を横に振る。

さらさらと流れるプラチナ・ブロンドの髪は、夕陽をきらきらと反射させた。

—— そんなはずはない。ユウは、ただのユウだ。

何処かでくすぶり続ける不安を強引にでも消し去るために、無理矢理説き伏せるように思いを強くさせる。

そうして目を閉じて、意識の奥底深くまで全ての感覚を沈めて空虚に浸り、その後、ゆっくりと感覚を戻していく。

「いらつしゃってましたか、殿下」

ゆっくりと双眼を開きながら、戻りつつある感覚に流れ込む気配の主に声をかけた。

「ああ、すまない。邪魔をしたか？」

「いえ。こちらこそ、申し訳ありません。何か、ありましたか？」
振り返ったヴィンセントの目に映ったルーカスは、葛藤と憔悴の面立ちを隠さずに佇んでいた。

「……ルー？」

「……ヴィンス。お前にだけは伝えておきたいことがあって……な。悪い、聴いて……くれる、か？」

俯き加減で力なく告げたルーカスに、ヴィンセントはただ、静かに、頷き返す。

それを見たルーカスの表情が、少し、和らいだ。

「ユウは、やはり、あの人物の転生者らしい……」

簡素な応接に通され、ルーカスは開口一番、ヴィンセントに告げた。

予想を超えた発言は、グラスに水を注ごうとしていたヴィンセントの動きを一瞬の間だけ止めた。

「なんで、あの子なんだ……」

苦渋に満ちた声が、ポツリと零された。

「落ち着いて、ルー」

普段は人目を気にして主従関係を意識し続けるヴィンセントの口調が、幼い頃からの友人を労るものへと変わった。

「あの人物って、誰の事だい？」

ルーカスの正面に水を湛えたグラスを置き、自身も椅子にかけた

ヴィンセントが訊ねる。

「今更か？」

「ルー？」

吐き捨てるようなルーカスの口調を怪訝に思い、ヴィンセントは名前を呼んだ。

「なんで、あの子なんだ？ 本人が望みもしないのに別世界へと引き擦り込まれただけで、もう、充分じゃないか！ なのに、何故！」
「落ち着け、ルー！」

いつにない厳しいヴィンセントの声に、ルーカスは我に返ったかのような顔を見せ、そして、再び苦悶の表情をにじませた。

「……話が見えない。何があったんだ？」

ヴィンセントは穏やかな声でルーカスに問う。

「……すまん、ヴィンス」

「なにが？」

「俺は、ユウが好きだ」

「……ルー、ますます話が見えないよ。一体どうしたんだ？ ルーらしくない……」

右手で額を覆い、軽く左右に首を振りながら、ヴィンセントは溜息とともに吐き出す。

その姿はいつもと変わらない様子だったが、見えないようにした左手は、血が薄っすらと滲むほど固く握られ、小さく震えていた。

「やはり、ユウは“偉大なる魔女”らしい」

目の前に置かれたグラスの水に口を付け、ルーカスは静かに話し始めた。

「正確に言つと、魔女の“転生者”らしいが……」

「転生者？」

「ああ、そうらしい。一週間前の、あの膨大な魔力が“覚醒”だったそうだ」

「覚、醒……」

そこまで言葉を交わすと、二人は黙り込んだ。

「俺たちが小さい頃から聞いてきた魔女の話と、実際の大戦の話には、随分と相違点があるらしい」

ルーカスが目を伏せたまま、静寂を破る。

そして、国王の執務室でエディから聞かされた大戦の話を、かい摘んでヴィンセントにも語った。

「それを聴かされてきたのか？」

「ああ」

「確証は？」

ヴィンセントに詰められ、ルーカスは口を噤む。

「ない、のか？ それをお前は信じるのか？」

「嘘であれ、真実であれ、俺は、あの子を失いたくない。それだけだ」

「ルー、お前……」

「俺は、ユウを護りたいだけだ」

「次期国王の発言として、それが許されると思うのか？」

「……王太子である前に、俺も一人の人間だ」

すい、と頭を上げたルーカスの視線に、捕らえられたヴィンセントは息を呑む。

真っ直ぐ自分に向けられた王家に受け継がれる瞳は、ただ、信念を貫こうと、僅かな曇りもなく、そこにあった。

忘れた呼吸を取り返すかのように、ヴィンセントは大きく息を吐く。

「……不便^{ふびん}だな」

「お前に言われたくないよ、ヴィンス」

互いに顔を見合わせ、ニヤリと笑みを漏らす。

「それにしても、そこまで思い詰めるのは何故だ？ 魔女の話に、続きがあるのか？」

「陛下は……父上は、ユウを盾にしようとしている」

「な?!」

「あの力を利用して、国を護ろうとしている」

「バカな……ユウを捨て駒にしようと言うのか？ 何も知らないと言っのに？」

「力をコントロールできるように、近々、エディの下で魔術の教育を始めさせるそうだ。自分が犠牲になることを厭わないあの子の事だ。巧く扱えるようになった自分の力が皆を護ると聞けば、自ら進んで最前線へ赴くだろう」

「ああ、間違いなく。ユウは、そう言う気性だ」

「あの子にそんなことはさせたくない。血にまみれた場所など、あの子の立つ場所ではない。それに……」

ルーカスの言葉が、不意に途切れた。

「それに？」

「……想い人一人護れずに、国なんか護れるかつ！」

不貞腐れたように口元をへの字に歪め、吐き捨てるように呟くルーカスを、複雑な思いでヴィンセントは見詰めた。

「……で、どうするつもりだ？」

「妃として、迎える」

ヴィンセントの問いかけに、間髪を容れずルーカスが答える。

「そ……！」

「何処の国が、戦わせるために王妃を戦地に送り込む？ 俺には王妃候補は何人かいるようだが、正式に取り決めた婚約者はいない。不可能ではないだろうか？」

「だからと言って、それは！」

「……思い、付かないんだ。どうしたら、引き留められるか。俺は、ユウを護るためだったら、どんな手段も使う。汚いと罵られようと、構わない」

「ルー……」

激しすぎるルーカスの決意に、ヴィンセントは絶句した。

窓の外の茜色だった空はすっかり色を塗り替え、宵の闇が覆っていた。

「では、フィオナ様、本日はこれで下がらせて頂き、また明朝にお伺いさせて頂きます」

二人の侍女が、仕える女主人に深々と頭を下げる。

「今日も一日ありがとう、リア、ユウ。また、明日ね。御苦勞様」

フィオナは花がほころぶような笑顔を浮かべ、目の前の二人に一日の労をねぎらう言葉をかけた。

「では、失礼致します」

「ありがとう、リア」

「おやすみなさいませ、フィオナ様。よい夢を」

「ありがとう、ユウ。あなたも、よい夢を」

それぞれ暇の挨拶をして部屋を出て、詰所へと戻った。

「今日もお疲れ様、ユウ。いつも、ありがとね。私気が回らなくて」

「そんな。たまたまできることをしただけで……。リアさんも、今日もお疲れ様でした」

お互いに顔を見合わせてにこやかに言葉を交わす。

そんな穏やかな時間を、ユウは心から喜んだ。

「じゃあ、私はこれで部屋に下がるから。また明日ね、ユウ」

「はい、リアさん。おやすみなさい」

大きく手を振り自室へと引き上げていくリアの後姿を、ユウはここにこと微笑みを浮かべて見送る。

「ユウ」

その姿が見えなくなった頃、後ろから、名を呼ぶ低い声が響いた。不意打ちを食らったユウは、一瞬、呼吸を忘れる。

小さく息をし、恐る恐る振り返ると、そこにいたのはルーカスだった。

「……ルーカス殿下……もう、驚かさないでくださいよっ！」

ユウがその姿を認め、ホッとしたのもつかの間、ルーカスの様子がおかしいことに気付く。

いつもの掴みどころのない雰囲気はなりを潜め、酷く深刻な表情でユウを真っ直ぐに見ている。

「殿、下？」

首を傾げ恐る恐る訊ねるユウの腕をとり、ルーカスは、詰所へと足を踏み入れ、扉を閉めた。

「殿下、どうなさっ……」

「ユウ。用件から言う。……私の妻になってくれ」

その場の空気が、一瞬にしてビリビリと緊張する。

「……今、なん、て？」

「聞こえなかったのなら、何度でも言う。ユウ、私の妻になって欲しい」

突然の求婚を受けピシリと固まってしまったユウに、ルーカスはそつと手を伸ばし、髪を纏めているピンを抜き取る。

逸らされることのない視線に、ユウは足がすくんで動けなかった。ほどかれたユウの黒髪に触れたルーカスの手が、つう、と毛先に向けて滑る。

「お願いだ。ユウ。頼むから、嘘でもいい、頷いてくれ」

毛先を滑り降りた手は、ユウの手を取り、その甲にルーカスはそつと口づけを落とした。

「……嘘でも、いいって……？」

「お前を、護りたい。全ての事から」

「……お話が、見えません」

「お前が好きだ。ずつと、傍にいて欲しい。こんな風に誰かを想うのは、お前が最初で最後だ。頼む。何処にも、行かないでくれ」

ふわりと引き寄せられ、柔らかに抱きしめられる。

「お願いだ、ユウ」

耳元にかかるルーカスの吐息に、ユウは一層、動揺の色を強めた。

「……あの、きちんと理由を話して頂けませんか？ 殿下」

今にも爆発しそうな自分の心臓を落ち着かせるように、ユウは、

少しゆっくりと声をかけた。

「突然そんな風に言われても、私には理解できません。それに、殿下は次期国王陛下。私は、異世界から落ちてきた得体の知れない小娘。どう考えても、無理です」

困ったような表情のユウを、ルーカスは小さく驚いたように見る。

「あ、でも、嬉しかったですよ？ “好きだ”　なんて、今まで誰にも言われたことなかったし。嘘でも……」

「嘘なんかじゃない、本気だ！」

少しはにかみながら話していたユウを、かみつくような勢いでルーカスが遮った。

「ユウが、好き、なんだ。愛おしくて仕方がない。この先も、ずっと傍にいて、俺の隣で笑っていて欲しいんだ」

ユウを抱きしめているルーカスの両腕に、力がこもる。

見上げた場所にある今にも泣きそうな顔をしたルーカスに、ユウは、ただならぬ事情を感じ取った。

「殿下、一度離してくださいませんか？　座ってお話ししましょう？」

ユウの右手がルーカスの背に回り、二、三度、そつと触れる。

「……すまない」

「珍しいこともあるんですね。殿下がこんなに慌てられるなんて」
ふわりと笑って話しかけるユウに、ルーカスは、先程とはうつてかわって、全く視線を合わさなくなった。

「何かお飲みになりますか？」

「いや、いい。さっき、ヴィンスの所で散々飲んできたから」

勧められた椅子に座ってもなお俯いたままのルーカスが、ポツリ、と呟いた。

「ヴィンスの所で……。そうですか……」

そう言つと、一瞬だけ微かにユウの表情が曇った。

「さて！」

気を取り直すかのように両頬をパチン、と叩き、テーブルを挟んでルーカスの向かいの椅子にユウが座る。

「先程のお話、きちんとしてくださいますよね？ 殿下」

力強い視線が、真っ直ぐにルーカスを見つめた。

視線の先の人物は、今もなお、苦い表情のままテーブルに目を落としていた。

「話も何も、俺は全部話したぞ」

「まだ何か、隠してますよね？ 殿下」

押し問答を何度も繰り返してはそれをのりくらりとはぐらかし、一向に視線を合わせない相手に、痺れを切らしたユウの口調が変わり始めた。

「隠してなんかないさ。全て、話した」

そう言つてルーカスは口を噤む。

「殿下、いい加減にしてくださいね？ 私に言えないことなんですか？ だったら、何故、あんな冗た……」

「冗談ではないと言っているだろう！」

目の前のテーブルを壊さんばかりに叩き付け、ルーカスが、ようやくユウを見た。

「で、ん……」

「あ……」

ユウの頬を、つう、と一筋、伝い下りていくものがあつた。

「す、すまない……。決して、そんなつもりはなかったんだ」

手を伸ばして、そっ、と頬に触れる。

「……話すと、もっと泣かせてしまつかも知れない」

眉間にギョツと皺を寄せ、ルーカスの表情が苦しげに歪む。

「でも、どんなお話でも、話してもらえないことの方が、私は悲しい」

「……わかった」

頬を伝う真珠のような涙を、傷ついたものに触れるかのように拭いて、ルーカスは、ようやく決意した。

そろそろ深夜の時間に差し掛かろうかと言う頃。
侍女の詰所には、まだ、二人の姿があった。

隣り合わせに座ったルーカスが静かに話し始める。

「一週間前、フィーに付き添って、図書館へ行ったな？」

「はい」

「その時、レンに絵本を渡された」

「はい。私、まだ、こちらの文字の読み書きがうまくいなくて……。ウォーレンさんが『自分の小さい頃、よく読んだ絵本だ』と薦めて下さったので」

「何の、絵本だった？」

「かつての戦争をお一人で抑え、この国を創られた、魔女様のお話でした」

その答えを聞いて、ルーカスが大きく頷く。

「きちんと読めていたんだな。……お前は、その魔女の生まれ変わりだ」

「……？ 仰る意味が、よくわからないんですが……」

ユウが困惑の表情をルーカスに向ける。それを、ルーカスは真っ直ぐ受け止めた。

「……だろうな。だが、事実らしい。一週間前から、お前の纏う“気配”に魔力が混じり始めている、それも膨大な量の」

「生まれ変わり、って……。魔力なんて、私にはないでしょう？」

それなのに、どうして生まれ変わりだなんて……」

「“覚醒” したからだ」

「“覚醒”？」

「封印を解かれた力が、ユウの“気配”として表に出始めているんだ。ここ一週間で、いろいろとおかしくなことが起きなかったか？」
「おかしいこと……」

ユウは目を閉じて、この一週間の出来事を思い浮かべる。

「そう言えば！」

唐突に目を開き、胸の前で両手を、パン、と合わせる。

「どうした？」

「落として割れたカップを片付ける時に切った指が、その日のうちに、跡形もなく治りました。それも、二、三度」

両掌をちらちらと見遣りながらユウが告げた。

「回復術か……。他には？」

「リアさんがつまづいた時、持っていた水桶を飛ばしてしまって、辺り一面も水浸しになって、私の隣にあったワゴンも水を被ったんですか……」

「ユウは濡れなかった」

「はい」

こくり、と素直に首を縦に振るユウを、ルーカスは苦しげに見た。

—— 無意識のうちに、いくつか魔術を使えるようだな。だとしたら、ますます……。

深刻な表情のルーカスを、ユウは心配そうにのぞき込む。

ルーカスは、ユウの頭を左後ろから片手で引き寄せ、自分の胸へと招き入れた。

「殿下？」

「……どこにも、行かないでくれ。ずっと、俺の隣に……」

「殿下、落ち着いて？ 仮に、私がその魔女様の生まれ変わりであったとしても、そこまで……」

「近い将来、戦争が始まる」

ルーカスは、何処か不安げなユウの言葉を、ピシヤリ、と遮った。
「そうなれば、力の強い者達は、否応なく召集され戦地へと送られる。自惚れるわけではないが、俺も間違いなく赴くことになる。uginsyaアート、レンもだ」

ユウは、俯いたまま息を詰めて、ルーカスの言葉を黙って受けていた。

耳元に響いてくる規則的な拍動に、その重さを感じた。

「……ユウ、このままでは、お前も最前線に駆り出される」
その言葉に、顔を上げる。

「させたくない。お前は、まだ、何も知らない。お前に、あのような場所は似合わない」

「……でも、その力が、私にはあるんでしょう？」

「お前は行かなくていい。行つてはならない」

「どうして？」

「ユウ……頼む、俺の願いを聞いてくれ」

切迫の度を高めたルーカスの声が、詰所に静かに響く。

ユウは、ゆるゆると、頭を横に振った。

「頼む……」

「申し訳ありません、殿下。私には、できません」

ルーカスの眼に、哀しげな笑顔が映った。

「でも、殿下のその気持ち、嘘でも、嬉しかったから」

「嘘じゃない！ 何度言ったら、わかってくれるんだ？ 俺には、

お前しかいないんだ。お前以外に考えられないんだ、ユウ」

その両腕の中に閉じ込めた存在に、思いの丈を吐露する。

「……失いたくないんだ。行かないでくれ」

「ごめんなさい。今は……」

視線を逸らしたユウの言葉に、藍青の瞳は、ほんのひと時、哀しみに揺れた。

「……では、今でなくていい。時間が経って……全て片が付いてから、もう一度、聞かせてくれないか？」

そっ、と愛しい娘の髪に指を滑らせる。

「……わかりました」

「ありがとう」

頭の頂に、優しいキスが落とされた。

「殿下……」

「疲れているのに、長い時間、すまなかったな。明日は休みを取って、ゆっくりすればいい。フィーには言っておく」

そう言って、ルーカスはユウから離れた。

「近いうちに、魔術の教師がつく。いろいろと気難しい人間だが、魔術の腕は確かだ。自分の身を護るためにも、しっかり学ぶように」

「はい、承知いたしました」

先程までの碎けた口調を消し、いつものように王太子として話すルーカスに、ユウは深く頭を下げる。

そのしぐさを目の当たりにして、ルーカスはくりと身をひるがえし、奥歯を、ギリ、と噛み締めた。

「……すまない、護ってやれなくて。どうか、無理だけはしてくれな。お願いだ……」

背後にいるはずの黒髪の少女に、ルーカスは、到底届くはずのない声で胸の内を吐き、詰所を後にした。

25・(後書き)

お立ち寄りくださりありがとうございます。

これをもちまして、第二章、終章です。

思った以上に長くなってしまいました…… (汗)

カメ更新も手伝って、ご迷惑をおかけしました……

でもこれで、ようやく、次の章に移れます。

ただ、次の章も、これまで以上の針山が…… (涙)

長々とお付き合いくださり、ありがとうございました。
そんなあなた様に、心からの感謝をこめて。

諒でした。

0・(前書き)

ご無沙汰しております……

第三章、本日より開始です。

漆黒の闇の部屋の中、少女が一人、佇んでいた。

遙か彼方から、絹糸のように細い光の筋が幾筋が差し込み、少女の頭部に落ちた。

光は少女の髪で踊り、その艶やかさを示す。

光の筋は次第に集束し、その太さを増していった。

光の中でゆつくりと瞼を開いた少女の瞳は、先程まで纏っていた闇と同じ色。

その瞳の奥には、癒えることのない哀しみを湛えていた。

瞳と髪の色を除いては、何処にでもいそうな見かけの少女。

しかし、彼女は、その風貌すがたには似付かわしくない剣を携え、一人、部屋を出ていった。

いつもと変わらない朝がやってきた。

窓から差し込む、ようやく昇り始めた朝陽。

ガラス越しに聞こえる、小鳥たちのささやき声。

何一つ変わらない、静かな朝だった。

横たえていた身体をゆつくりと起こし、ユウは、小さく息を吐き出す。

それからベッドを降りて窓を全て開け放し、そのままの姿で靴も履かずに、中庭へと足を進めた。

朝焼けの落ちる芝生を素足で感じ、傍らに植えられた名も知らぬ草花にそつと手をやる。

何ということのない些細な行動が、特別なことのように思える。そんな不思議な気分、ユウは包まれていた。

中庭の中央にある檜の木の幹に背中を預けて座り、昇り来る朝日を眺める。

知らぬ間に、その頬を涙が伝った。

「ユウ……」

突然聞こえた声に、ユウはその肩を、ビクリ、と震わせた。

「泣いて、いるのか？」

ユウは、その心配そうな小さな声に、ゆつくりと首を横に振った。「違うの、ヴィンス。泣いてるんじゃないのよ」

ゴシゴシと少し乱暴に目元をこすり、ぎこちない笑みを浮かべる。「目にゴミが入ったみたいなの。それだけ」

そう言って、すぐ後ろまでやってきたヴィンセントを振り返った。

「大丈夫ですか？ 見せて？」

隣に座ったヴィンセントの大きなあたたかい手に頤を取られ、つい、と上を向かされる。

ユウの目を覗き込むとする顔が近づくにつれ、ユウの目尻には、再び涙が湛えられた。

「ユウ……」

「ごめん、ね、ヴィンス」

痛ましげに眉を顰めたヴィンセントに、ユウはポロポロと涙をこぼしながら困ったように笑った。

次の瞬間、その大きな手はユウの肩を抱き、自身の胸に小さな身体を押し付けた。

「我慢、しなくていい。無理は、しないでくれ」

大きくはないその声に、ユウの涙の堰は決壊した。

ふわふわと頭を撫でる手に、ユウは次第に落ち着きを取り戻した。

「……ごめんなさい」

小さく呟いたその声を、ヴィンセントは、手を休めることなく黙って受け止めた。

「私、”偉大なる魔女”様の生まれ変わりなんだって……」

ポツリとこぼれた謝罪に続いて、ため息とともに吐き出されたユウの言葉に、ヴィンセントは、昨夜のルーカスを思い出していた。

常軌を逸脱したルーカスを思いとどまらせることができなかった己に、ギリ、と唇を噛み締める。

何処かの誰かが禁を犯して発動させた術によって、それまでの日常を奪われた、ユウ。

彼女を元の世界に戻してやることも、甘んじて受け入れたこの世界での気苦労を和らげてやることすらもできない自分を、ヴィンセントは嫌忌した。

「……すまない」

「ヴィンス？」

「あなたを元の世界に還かえしてやれない。この世界で護かってやることもできない。私には、何も……」

「ヴィン……」

視線を上げた先に見えた苦しげな表情に、ユウは、そっ、と右手

を伸ばす。

しかし、伸ばした手を不意にガシリとつかまれ、慌てて引き戻そうとするが叶わない。

おろおろと視線を揺るがせるユウを、ヴィンセントは、じっと見つめた。

「……この先、こんな風に顔を合わせることもなくなるでしょう」
小鳥たちの声にかき消されてしまいそうなくらい小さく呟いたヴィンセントを、今にも泣きそうな顔でユウは見上げる。

「ユウに、一つだけお願いが」

「何？ ヴィンス。私にできることなら……」

小首をかしげてそう答えたユウに、ヴィンセントは、至極真面目な顔をして言葉を続けた。

「……今、ここで、私があなたにキスすることを許してください」

「ヴィン、ス？」

「ルーが、昨夜、あなたに告げたでしょう？ 近い将来、大きな戦争が起きる、と。そうなれば、明日をも知れない。こうして平和な時間をあなたと過ごせた思い出に……」

「ダメよ！」

哀しげに告げるヴィンセントを、ユウは顔を赤くして叱咤する。

「どうしてそんなこと言うの？ あなたが諦めてどうするの？ あなたは、みんなにとって、いなくてはならない人。お願いだから、そんな哀しいこと、言わないで！」

「ユウ……」

「お願いよ…… いなく、ならないで……」

つかまれていた右手もいつの間にか解放され、ユウは、両手でヴィンセントの上着の裾をギュツと握りしめた。

「お願い。置いて行かないで。一人にしないで……」

パタリ、パタリ、と落ちていく涙が、寝間着に吸い込まれていく。
「大丈夫、いつも一緒だ。例え、姿が見えなくても、私はあなたと

共にいる」

ヴィンセントは片手で優しくユウの頭を抱え、その頂に口づけする。

「だから、泣かないで。ユウ……」

「ヴィンス、お願い。約束して？」

「約束する。ユウを一人にはしない。だから、安心して」

暖かで大きな手が、艶やかな黒髪の上を滑る。

「ありがとう、ヴィン……」

声が途切れ、ことりと、ユウの身体がヴィンセントにもたれかかる。

「ユウ？」

ヴィンセントの腕の中には、安心したように目を閉じ、小さく寝息を立てる少女がいた。

「怖くて、寂しくて、哀しいのを、我慢、してたんだね。ユウ……」
そつと額にキスを落とし、静かにその身体を抱き上げて、ヴィンセントは中庭を後にした。

1. (後書き)

お待ちいただいていた方がいらっしやいましたら、この場を借りてお詫びを。

ホントに、ホントに、申し訳ありませんでした。

いろんな意味で、書けずにおりまして…… ↑ 言い訳デス、ごめんなさい。

今日は、どうにかここまで書くコトが出来ました。

宜しければ、この先もお付き合いいただけると、泣きじゃくって喜びます。

本日は、遠路はるばる足をお運びいただき、ありがとうございました。

そんなあなた様に、心からの感謝を。

諒でした。

中庭と室内をつなぐ窓まで戻って、ヴィンセントは、ユウが裸足のまま中庭に出ていたことに気付き、困ったように微笑んだ。

抱き上げていたユウの身体をベッドに横たわせ、ポケットからハンカチを取り出して、ユウが目を覚まさないようにそっと足の汚れを拭う。

そんな感触がやはりくすぐったかったのか、むにゃむにゃと寝言を言いながらユウは身体をよじる。

無防備なその姿に、ヴィンセントは、ふにやり、と溶けるように微笑んで、子猫のように背中を丸めて眠る少女の頭の頂にそっとキスを落とし、耳元に小さなささやきを残して部屋を出ていった。

—— 目醒^めメヨ、我ガカラ継グ娘。

闇の奥から響く低い声に、ユウはゆっくりと目を開ける。
見慣れない周囲に戸惑う彼女に、声は穏やかに語りかける。

—— 恐レナクトモヨイ。主ノ心ノ中ジャ。

「心の、中？」

—— ソウジャ。主ニ直接逢ウコトハ、叶ワナクナッテシマッタカラ……

「どういうこと、ですか？」

—— 我ノ遣^{のこ}シテキタ力ガ尽キル。アヤツトノ約束ヲ、違エルコトニナッテシマッタ……

闇の奥から、ぼんやりと光が浮かび上がる。

次第にそれは、霞がかつた一人の人物、いつか鏡に浮かび上がった、黒髪の少女を形どった。

「“魔女”、様？」

—— 主マデソウ呼ブノカ？

目の前の少女は苦笑いを見せた。

—— 我ハ、魔女デモナンデモナイ。タダノ人間ジャ。ホンノ少シバカリ、力ガ強カツタダケデ……

先程とは違う哀しげな声に、ユウは、キュツと唇を噛んだ。

—— ソノヨウナ顔ヲスルデナイ。

「でも……」

—— 我ニトツテハ、終ワツタコトジャ、何モカモ。

白く透ける手が、ユウの頭を撫でるように動く。

—— 主ニハ、スマナイコトヲシテシマッタ。

「エヴァ様？」

—— 予想ヲ越エタ力ノ消耗デ、再ビ争イノ火種ガ燦リハジメテシマッタ。アヤツト、固ク約束シタノニ……

「約束、ですか。それを、あなたは、ずっと一人で守って？」

—— アア。アヤツトノ、最初デ最後ノ約束ダツタカラナ。ソレナノニ……

「ここまでお一人で守って来られたんです。その方も、きっと認め

てくださいます」

ぴたりと動きを止め、驚いたような表情になったエヴァに、ユウは微笑んだ。

「心の強い、お優しい方なのですね。あなたが、この国の人々から慕われ続けているのが、わかるような気がします」

—— ソウ、ダロウカ？

「ええ、みんな、あなたを慕っています。私もあなたの熱烈な信者を、一人、知っていますから」

ユウは、図書館で絵本を手にしたウォーレンを思い出し、微笑みを深めた。

「だから、大丈夫。あなたはこの国をお護りになる、偉大な方のお一人なのですよ」

—— アリガトウ……

暫くの沈黙の後、震える小さな声で、エヴァは答えた。

—— 主八、強イナ。

その言葉に、今度はユウが驚いて声を上げた。

「そんなことは、ないです！」

—— 我ニ恐怖ヲ感ジテハイナイダロウ？

「それは、あなたがエヴァ様だから……」

戸惑うユウに、フフフ、と小さく笑い、エヴァは訊ねる。

—— 護リタイモノガ、アルノジャナ？

その言葉に、静かに、しかし、しっかりとした意思を載せてユウは頷いた。

—— 主ガ、今、ココニイル理由ヲ伝エヨウ……

2・（後書き）

先回、『1週間に1回は更新!』なんて大口をたたき、早速蹴倒したほう、諒です……

試験も終わり、少し落ち着くと思ったのですが、諸事情（全くもって、個人的な事情ではございますが……）により、遅くなりました。

ごめんなさい。ホントにゴメンナサイ。

こんな奴ですが、今後もお付き合いいただけると嬉しいです。宜しくお願い申し上げます。

心からの謝罪をこめて。
諒でした。

3・(前書き)

人の亡くなる記述が本文中にあります。

苦手な方は、申し訳ございません。閲覧をお控えください。

皆様のご協力、ありがとうございます。

突然の申し出に、ユウは、こくり、と息を呑む。

—— 何ノ前触レモナク巻キ込マレテ、サゾ、不愉快ダッタロウ？
ユウは、すまなそうに俯くエヴァを前に、大きく横に首を振った。
「不愉快ではなかったです。……でも、不安だった。怖かった。寂しかった。どうしていいか、わからなかった……」

話すうちに溢れる涙を拭いてもせず、真っ直ぐに前を見つめる。
「どうして、私なの？ って、いつも思ってた。帰りたくて、でも、できないって言われて……」

両手で顔を覆い、子供の様に泣きじゃくるユウを、淡い光が慰めるようにそっと包む。

—— スマナカッタ、ユウ。主二八、ドレホド詫ビテモ、足リルコトハナイダロウ……

ふるふると横に揺れる黒髪に、声の主は静かに告げる。

—— 無理矢理巻キ込ンダアゲク、コンナコトヲ言ウノハ、全クモッテ非常識ダト重々承知シテイルノダガ…… 引キ受ケテハクレナイカ？ 我ノ、最初デ最後ノ頼ミヲ。

両手で真っ赤になった眼をこすり、異世界から来た娘は、顔を上げて静かに視線をあわせた。

* * * * *

エヴァ＝メル・ウオードンは、この大陸の東の果ての小さな村で生まれ育った。

先の大戦は、彼女がこの世に生まれ落ちた頃には、既に大陸全土にその範囲を広げており、勇敢な剣士であった父は、徴兵され派遣された激戦地の前線で、美しく優しかった母は、この村の特産品であった羊毛の織物を隣国との境の街まで売りに出た帰りに盗賊に襲われ、相次いでその短い生涯を終えた。

そうして一人残された、まだ十歳にもならなかったエヴァは、村の外れの森の奥にある小さな水車小屋で、一人、隠れるように静かに暮らすようになった。

その理由は、この大陸では見られない色彩を持っていたから。

“闇”を意味する色は、村人たちに大きな理由もなく忌み嫌われ、またそのせいで、少女は心を閉ざしていた。

彼女が両親を相次いで亡くして五年、いよいよ大陸の果てにあった村にも戦火が回り、村中の抵抗空しく、一夜のうちに廃墟と化した。

当然のように金品は根こそぎ略奪された上に、男たちは始末され、女、子供も酷い扱いを受け、連れ去られた。

しかし、村を襲った兵たちも、流石にうつそうと生い茂る森の奥まではやって来なかった。

ぶすぶすと煙り続ける焼け落ちた家の間を、誰か、一人でも隠れ通した人がいないか捜し続けたが、呼びかけに応える者は誰一人、いなかった。

エヴァは、はらはらと零れ落ちる涙を拭うこともせず、たった一

人で村人たちを弔い、その墓前に、野に咲く花を手向けた。

時間にして、丸五日。たった一人で、やり遂げた。

そうして水車小屋へと戻り、父の形見として大切にしまわれていたレイピアを手にし、襲撃から七日目の夜が明ける前、この村を後にした。

* * * * *

——ソレカラハ、毎日、生キルカ死ヌカノ瀬戸際ヲ渡リ歩クヨ
ウナ日々ダツタ。ロクニ剣も扱エズ、モチロン、食料や金ナンカ持
チ併セテイナイ。結局、村ヲ出テ十日ホドデ、アツサリ行キ倒レテ
シマツタ。

苦笑いをするエヴァに、ユウは眉根をひそめる。

——タダ、ソノ時、一人ノ術師ガ我ニ救イノ手ヲ差シ出シタ。
ソノ手ガナケレバ、我ガアヤツニ逢ウコトモナカッタ……

3・（後書き）

今回は、魔女様の生い立ちを。

一気に進むかと思われていた方、申し訳ございません……（平伏）

少し思うところがあつて、の回り道です。

お付き合いいただけると、嬉しいです。

いつもありがとうございます。

そんなあなた様に、心からの感謝をこめて。

諒でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5202t/>

黒の管理者

2011年11月1日09時30分発行